長坂町埋蔵文化財発掘調査報告第3集

小和田館跡

（小和田北遺跡）

県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1986・3

長坂町教育委員会
峡北土地改良事務所

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告第３集

小和田館跡

（小和田北遺跡）

県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

１９８６・３

長坂町教育委員会
峡北土地改良事務所

序　　文

私たちが住んでいる長坂町の現在の姿も、これから何世紀か後の人々にとっては遠い過去のものとして眺められる訳で、私たちの郷土長坂がどのような経過をたどって成り立ってきたのか、多くの先人たちの残したものを私たちの子孫たちへ、大いなる遺産として伝えていくことが、現在に生きる私たちに課せられた大きな使命であると痛感いたします。

長坂町では、県営圃場整備事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本年度も58年・59年度に引き続き小和田館跡の調査を行ないました。その結果全国的にも類例のない金箔を付した草木文様のある銅製碗蓋や、数多くの中国製青磁片が出土いたしました。これらの資料は長坂町の中世史を解明するのみでなく日本の中世史を研究する上でも非常に貴重な資料でありましょう。ここにその成果を公けにし、広く活用いただければ、と思います。

最後に、本発掘調査にあたり、御指導いただきました県教育庁文化課関係各位、また深い御理解のもと、多大の御協力をいただきました地元の皆様に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

昭和61年３月

長坂町教育委員会

教育長　向 井 正 汎

例　　言

1　本書は昭和60年度県営圃場整備事業に伴う小和田北遺跡の調査報告書である。

2　本調査は峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁・山梨県より補助金を受けて長坂町教育委員会が昭和60年７月１日より９月10日にかけて実施した。

3　本書の報告は第Ⅰ章を坂本正輝が、第Ⅱ～Ⅵ章を鈴木治彦が執筆した。

4　本書で使用した実測・トレース・写真は鈴木によるものである。

5　本書の編集は鈴木が行なった。

6　銅製品の修復・保存処理・分析は東京国立博物館　桜井洋氏にお願いした。

7　本書の作成にあたって、下記の方々より御教示をいただいた。記して感謝する次第である。

青木繁夫・秋山　敬・植松又次・香取忠彦・櫛原功一・小林　真
佐野勝広・信藤祐仁・末木　健・田代　孝・萩原三雄・畑　大介
樋口清治・平野　修・深沢裕三・八巻与志夫・山路恭之助・
山下孝司・米田明訓・雨宮正樹・池上　悟　（順不同）

8　調査組織

調査主体　長坂町教育委員会
調査担当　鈴木治彦
事 務 局　長坂町教育委員会
　　社会教育主事　坂本正輝
　　小林和夫

9　調査参加者

小沢　茂	小沢みずえ	鈴木節子	清水光子	滝田武子
鳥畑松代	長島澄子	日向一子	平島弘子	平島富士子
平島雪枝	保坂和博	堀内よしみ	森沢敏子	

10　本調査の出土品、諸記録は長坂町教育委員会が保管している。

11　本調査にあたり、峡北土地改良事務所、地権者の方々の御理解、御指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

目　　次

序　　文
例　　言
目 次・凡 例

第Ⅰ章　調査に至る経緯……2
第Ⅱ章　調査の方法と経過……6
第Ⅲ章　遺跡の地理的・歴史的環境……7
第Ⅳ章　遺構調査……9
　第1節　住居址……9
　第2節　掘立柱建物址……19
　第3節　溝……19
　第4節　集石遺構……26
　第5節　地下式土壙……29
　第6節　土坑……30
　第7節　ピット群……31
第Ⅴ章　出土遺物……44
　第1節　土器・陶磁器……44
　　1　住居址出土土器……44
　　2　土坑出土土器……47
　　3　遺構確認面出土土器……47
　　4　陶磁器……47
　第2節　石製品・土製品……50
　第3節　金属製品……52
　第4節　その他……56
第Ⅵ章　考　察……58

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　遺跡の立地……3
第３図　遺構配置図……4
第４図　第１号住居址……10
第５図　第１号住居址カマド……11
第６図　第３号住居址……14
第７図　第３号住居址カマド……16
第８図　第４号住居址……17
第９図　第４号住居址カマド……18
第10図　第５号住居址……20
第11図　第７号住居址……22
第12図　第８号住居址……24
第13図　第１号掘立柱建物址……25
第14図　第１号溝……26
第15図　第１号集石……28
第16図　第４号土坑……29
第17図　第28号土坑……30
第18図　第43号土坑……31
第19図　第51号土坑……31
第20図　第13・44号土坑(地下式土壙)…32
第21図　第１・２号土坑、ピット1～3…33
第22図　第３・６・７・８・９号土坑…34
第23図　第10・11・12・14・15号土坑…35
第24図　第16・17・18・19・20・22号土坑…36
第25図　第21・23・24・25・26・27号土坑……37
第26図　第29・30・31・32・33・34・35号土坑……38
第27図　第36・37号土坑……39
第28図　第38・39・40・41号土坑……40
第29図　第46・47・48・49・50号土坑…41
第30図　第52・53号土坑……42
第31図　H－８グリットピット群……42
第32図　H－９グリットピット群……43
第33図　I－８グリットピット群……43
第34図　第１号住居址出土土器……44
第35図　第３号住居址出土土器……46
第36図　第１号集石出土土器……47
第37図　遺構確認面出土土器……48
第38図　陶磁器（１）……49
第39図　陶磁器（２）……50
第40図　石　器……51
第41図　土製品……52
第42図　砥　石……53
第43図　石臼・石擂鉢・五輪塔……54
第44図　古　銭……55
第45図　遺構及び確認面出土金属製品…56
第46図　調査区外五輪塔……57

表　目　次

第１表　土坑集成表……61
第２表　ピット集成表……63
第３表　金属器集成表……66

図　版　目　次

1	遺跡全景（西から）	第５図版	1	第８号住居址
2	遺跡全景（北から）		2	第１号掘立柱建物址
3	第１号住居址		3	第１号溝
1	第１号住居址カマド	第６図版	1	第１号集石
2	第３号住居址		2	第４号土坑
3	第３号住居址カマド		3	第４号土坑（完掘）
1	第４号住居址	第７図版	1	第28号土坑
2	第４号住居址カマド		2	第43号土坑
3	第５号住居址		3	第13号土坑
1	第５号住居址銅製品出土状況	第８図版	1	第44号土坑（東から）
			2	第44号土坑（北から）
2	同		3	第23～27号土坑
3	第７号住居址	第９図版	1	第46～50号土坑
			2	調査区外五輪塔

凡　　例

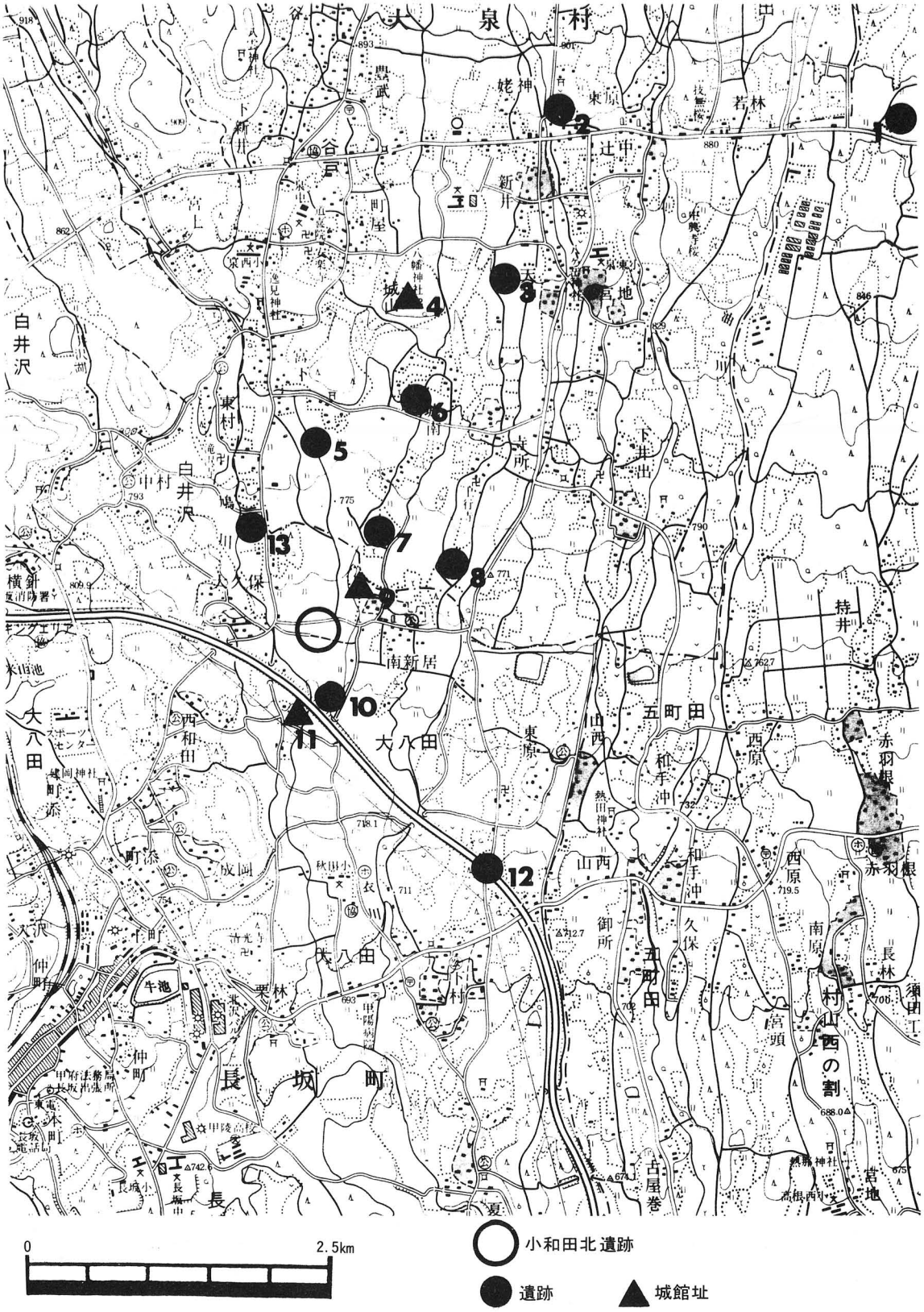
1　各遺構の縮尺は竪穴住居址カマドが１／30、溝が１／80、それ以外はすべて１／40に統一してある。

2　遺物の縮尺は１／３を原則とするが、石器・古銭等必要に応じて１／１、１／２等を使用する。

3　本書で使用した地図は長坂町発行１／25000地形図と１／1000地籍図である。

4　各遺構の方位はすべて磁北に合わせた。

5　各遺構挿図中に記してある断面基準線は標高で表わした。


大泉村
姥神
東原
若林
谷戸
辻中
新井
宮上
町屋
城山
宮地
白井沢
東村
中村
南
寺所
下井出
鳥川
人久保
横針
南新居
持井
五町田
大八田
西和田
東原
山西
和手沖
西原
赤羽根
町添
成岡
牛町
大沢
仲町
牛池
栗林
長坂町
久保
御所
宮頭
西の割
南原
長林
本町
長
古屋巻
宮地
0
2.5km
小和田北遺跡
遺跡
城館址

第１図　遺跡の位置

第Ⅰ章　調査に至る経緯

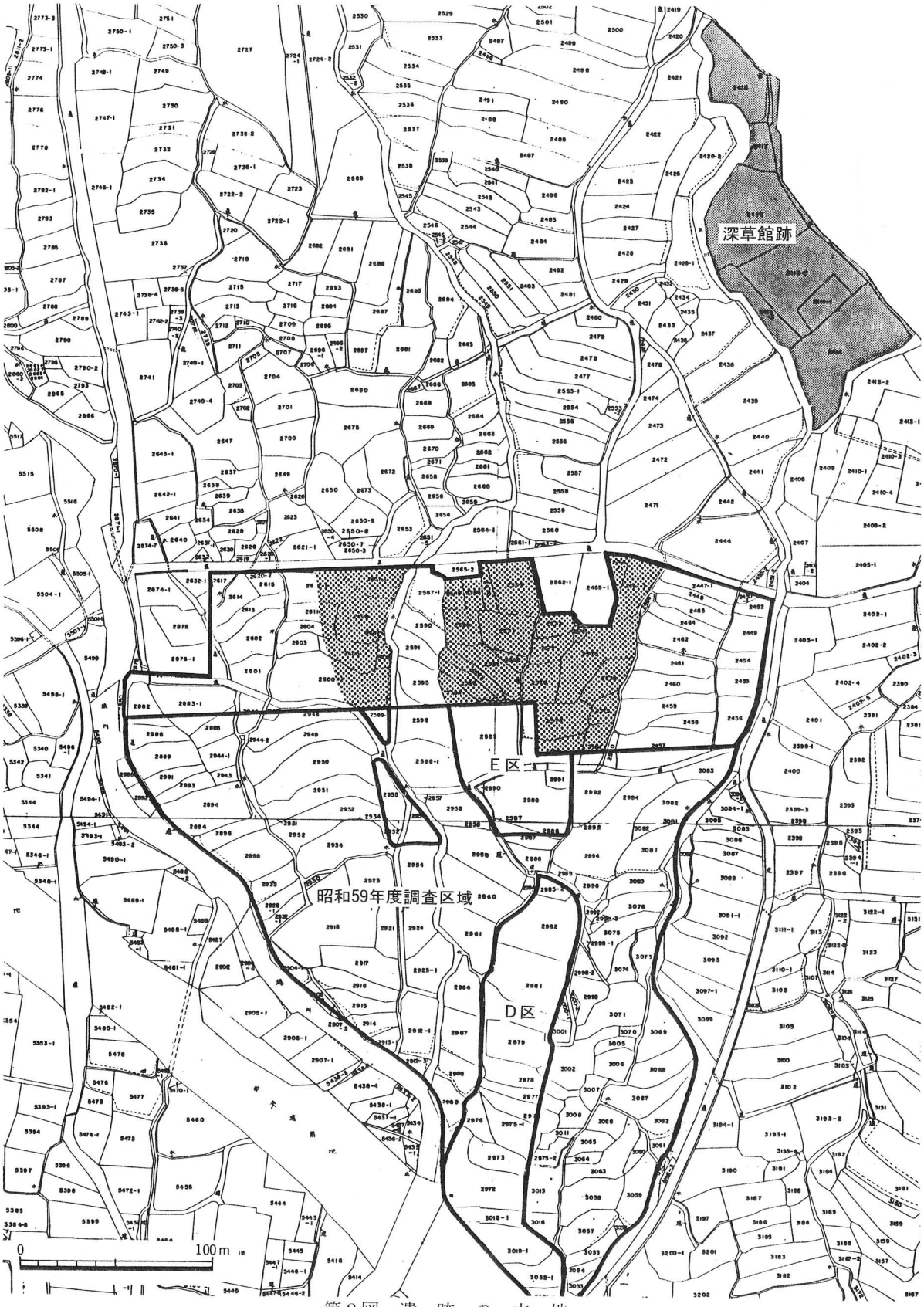
昭和54年度から推進されている圃場整備事業は、水田利用再編対策の推進、作物体系の確立、農地の集積による機械化と省力化等、農業生産基盤の確立をもって農業振興を図ることを目的とするものである。県営圃場整備事業は昭和58年度から実施され、すでに大和田、夏秋地区の16*ha*が完了している。

昭和60年度は大和田地区の36,000㎡が計画され、昭和59年12月、長坂町教育委員会が現地踏査を実施し、遺跡の有無を検討した。その結果、当該計画地は「深草城址」の外郭に位置し、昭和58・59年度に調査した小和田館跡の同一尾根上にあることなどから、長坂町の中世史解明に重要な地区であると判断し、試掘調査を実施することになった。

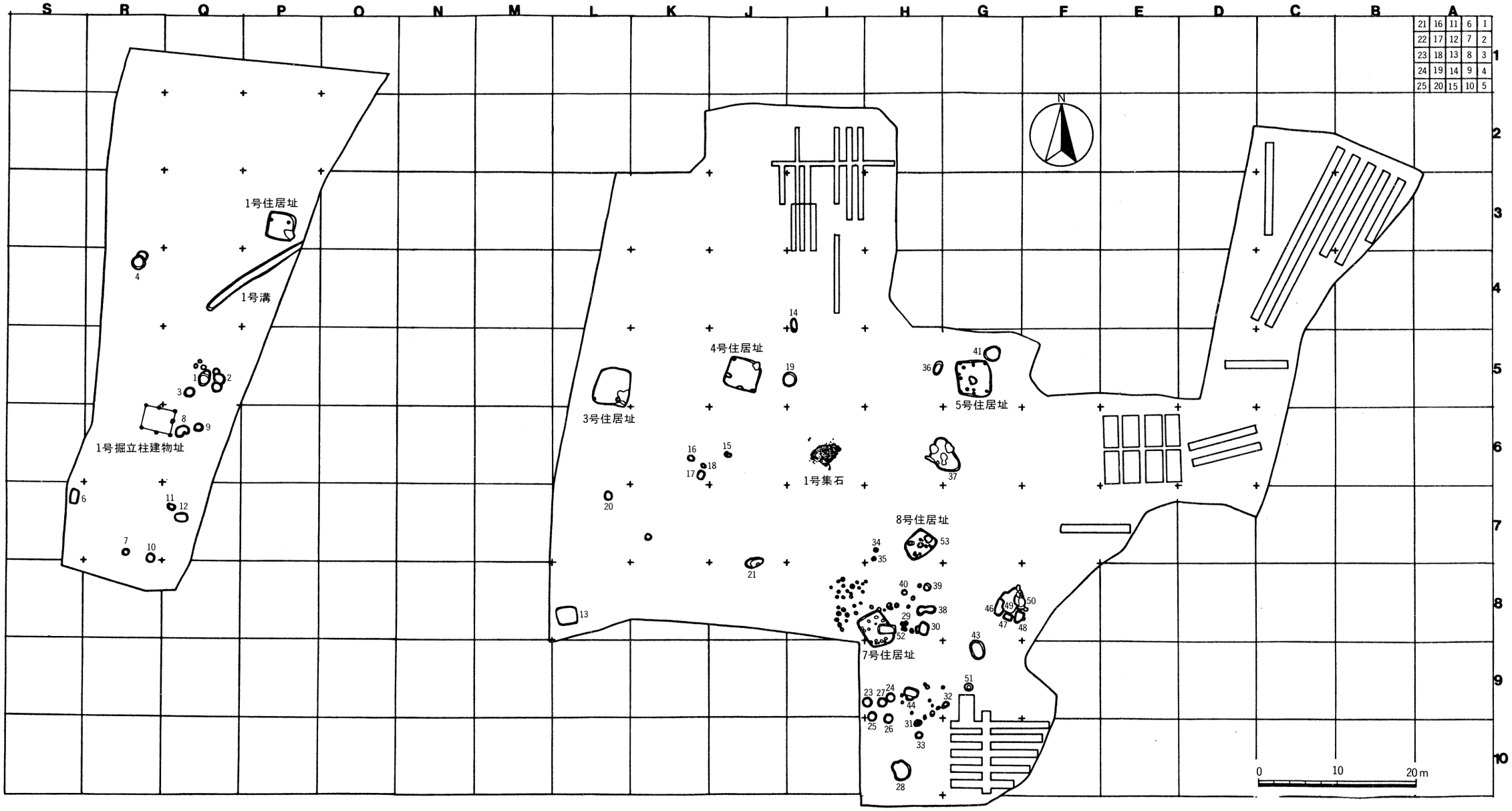
試掘調査は、昭和60年12月長坂町教育委員会が実施した。2*m*×10*m*グリット方式によって計画地の全域を調査した。その結果、縄文中期から中世にかけての土器片と、土壙、住居址等多数検出された。結果に基づき山梨県教育庁文化課、峡北土地改良事務所と協議を行い、本調査を実施することになった。調査対象面積は、16,000㎡、調査主体は町教育委員会があたることとした。

昭和60年1月17日、文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、昭和60年4月18日交付の内定を受ける。同7月24日文化庁長官に昭和60年度文化財保存事業費補助金交付申請書を提出する。また、昭和60年6月14日峡北土地改良事務所と長坂町との間で、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定書を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、昭和60年7月1日から着手し、12月10日発掘作業を終了、昭和61年3月31日全ての調査を終了した。



第2図　遺　跡　の　立　地


S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
1号住居址
1号溝
1号掘立柱建物址
3号住居址
4号住居址
5号住居址
1号集石
7号住居址
8号住居址
N
0 10 20m

第3図 遺 構 配 置 図

第Ⅱ章　調査の方法と経過

本年度の調査は昨年度調査より引き続いて２本の尾根部分について実施したが、昨年度に行なった試掘調査をもとに遺構の存在を確認し、遺構の存在のみられなかった部分については土捨て場とした。

遺跡中央を流れる用水路より東側尾根をＡ区、西側尾根をＢ区とし、重機による表土剝ぎの後、鋤簾による精査を行ない、遺構確認をした。確認面での遺構検出ののち、遺構調査を行なうにあたって、磁北線に沿って東西南北を基準とする10×10*m*のグリットを調査区全域にかかるように設定し、東から西へＡ～Ｔ、北から南へ１～11という組合せにより各グリットを表示した。さらに各グリットを２*m*×２*m*の、25個の小グリットに分割して遺構調査をすすめることとした。

調査は圃場整備との関係上、西側のＢ区より開始した。台風６号の影響で、７月３日より重機による表土剝ぎを開始する。表土剝ぎは地形上、北から南へ下がるようにすすめ、この段階において住居址１軒が検出された。Ｂ区表土剝ぎは７月６日に終了し、引き続いてＡ区の表土剝ぎにうつる。Ａ区の表土剝ぎは西から東へ、やはり北から南へ下がるようにすすめた。Ａ区の表土剝ぎは７月19日に終了した。

７月10日より作業員を投入し、遺構確認を開始する。それと併行してＢ区にグリットを設定する。遺構確認後、土坑より調査をはじめ、順次住居址、掘立柱建物址を調査する。Ｂ区の調査は７月24日に終了し、住居址１軒、掘立柱建物址１棟、溝１条、土坑12基、ピット３基を検出した。

Ｂ区終了と前後して７月22日よりＡ区の調査を開始する。Ａ区遺構確認と併行してグリットを設定し、西から東へと調査をすすめた。Ｂ区同様、土坑より掘り始め、住居址へと移る。７月31日に５号住居址北西部床直上にて銅製品の出土をみる。８月13日から15日にかけてお盆休みとしたものの、それ以外は雨天による作業中止もなく、炎天下の中作業は順調にすすみ、９月９日にＡ区の調査を終了した。Ａ区においては住居址5軒、集石遺構１基、土坑41基、ピット48基を検出した。

また、本調査と併行して調査区域外の地番2562-1に存在する五輪塔についても調査を行ない、実測及び拓影を行なった。

９月10日に器材を撤収する。

11月１日より秋施工に伴い、別当地区の調査を開始し、12月10日に終了する。

なお、本報告書は小和田分に限り、別当分は来年度に報告するものとする。

第Ⅲ章　遺跡の地理的・歴史的環境

長坂町は八ヶ岳南麓、八ヶ岳の雄大かつ緩やかな裾野部に位置している。その上流より湧出した小泉は幾本も流れ出て、裾に向って流合・分岐をくりかえしながら、やがて釜無川や須玉川に注いでいる。こうした小河川は統合されるにしたがってその浸蝕力を増し、そのため長坂町の標高780m付近においては複雑に谷を形成しており、その谷に狭まれた部分は南北に長い尾根となっている。

本遺跡はこうした尾根上に立地しており、東の西衣川、西の鳩川によって狭まれている。長坂町に限らず八ヶ岳南麓ではこうした地形上に立地している遺跡が多い。

さて近年、北巨摩郡において県営圃場整備事業が積極的にすすめられており、それに伴い数多くの貴重な遺跡が調査され、良好な資料が蓄積されてきている。以下、いくつか示してみると（第1図)、

1	石堂遺跡	縄文後・晩期。金生遺跡に匹適する大規模な配石遺構が検出されており、今後の成果が期待される。
2	東姥神遺跡	平安時代集落。
3	天神遺跡	縄文前・中期・平安時代集落。
4	谷戸城址	中世城館址。
5	豆生田遺跡	縄文後期・平安時代集落。
6	城下遺跡	平安時代集落。掘立柱建物址が顕著である。
7	金生遺跡	縄文前～晩期・平安時代・中近世。国指定史跡。大規模な配石遺構が検出され注目された。また、B区より検出された中世遺構は深草城址に伴うものと考えられ、従って本遺跡との関連も想定される。
8	寺所遺跡	縄文前・中期・平安時代集落。
9	深草館跡	中世城館址。長坂町指定史跡。
10	小和田遺跡	縄文中期・平安時代・中世。特に中世の資料にみるべきものがある。
11	小和田館跡	中世城館址。
12	柳坪遺跡	縄文中期・平安時代集落。中央道及び長坂インターチェンジ建設に伴い数回にわたって調査され、大規模な集落の様相が把握されている。
13	別当遺跡	縄文後期集落。

本遺跡の位置する八ヶ岳南麓の地は縄文時代以来、非常に重要な位置を占めている。金生遺跡・石堂遺跡・柳坪遺跡に代表されるように縄文時代においては一大集落地帯であり、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡・遺物の報告は極めて少ないものの、平安時代以降クローズア

ップされてくる。特に北巨摩の地は柏前牧、真衣野牧、穂坂牧という、所謂「三官牧」の置かれた地として古くから注目されている。律令制の崩壊へとつながる公地の私有化は多くの荘園を生み、これは北巨摩においても例外ではなく大八幡荘等が知られている。そして、こうした私有地は官牧にも及び、私牧化した牧はやがて甲斐源氏の基本的な生産基盤となっていく。こうした中で、本遺跡は大八幡荘の中心に位置し、北東には深草館跡が隣接して位置し、また南には小和田館跡が位置し、さらに深草館跡の北約1*km*には谷戸城が位置するなど、中世の遺跡遺物が多く、中世史研究の上で極めて重要な位置を占めている。また、先に示した他にも高根町、須玉町、韮崎市等でも重要な資料が蓄積されており（註）、長坂町のみではなく周辺地域をも含めた巨視的な視野で歴史をみつめる必要性が改めて求められている。

註　例えば高根町湯沢遺跡、須玉町若神子城址、中尾城址、武川村宮間田遺跡等が挙げられる。このうち湯沢遺跡は多数の掘立柱建物址が検出され、古代における官衙址としての性格が想定され、宮間田遺跡は真衣野牧に関連する官衙と考えられており、その成果が期待されるところである。若神子城址、中尾城址は甲府と信濃を結ぶ街道上、佐久方面に向う佐久往環と諏訪方面に向う信州往還という、戦略上極めて重要な地点に位置している。このように北巨摩郡下においては単に一地方史の解明のみならず、従って周到な調査・研究が不可欠であるといえる。

第Ⅳ章　遺構調査

今回、検出された遺構は平安時代の竪穴住居址３軒、中世の竪穴遺構３基、掘立柱建物址１棟、溝１条、集石遺構１基、集石土坑４基、地下式土壙２基、土坑48基、ピット51基である。このうち、中世の竪穴遺構も一応、便宜上住居址として取り扱うものとする。

各遺構を取り上げる前に、本遺跡における層序を概述しておく。水田に伴う天土と床土は約30～40cmの厚さで認められ、その下に厚さ15～20cmの黒色土となり、ローム層に至っている。今回、埋没谷と判断した地点では、この黒色土が３～４mの厚さで推積しており、巨石を伴う礫層へと達している。

第１節　住　居　址

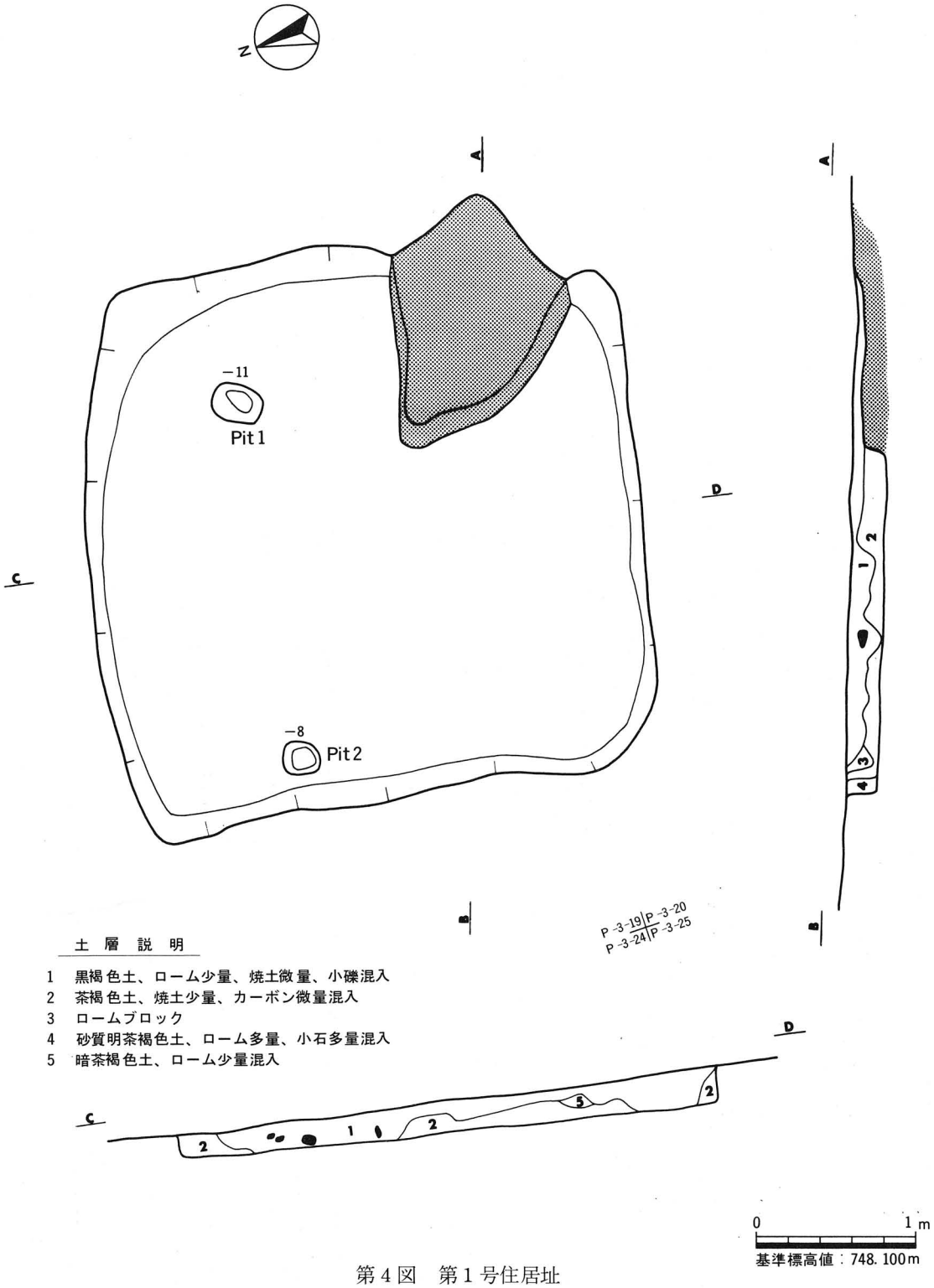
住居址はＡ区にて５基、Ｂ区にて１基の計６基が検出されている。第２・６号住居址は欠番とする。

第１号住居址（第４・５図）

第１号住居址はＢ区北側、Ｐ－３グリットの南側、第１号溝の北辺に位置する。主軸を北113度東に採り、壁長は東西南北それぞれ3.09m、3.02m、2.89m、3.43mを測る。東壁南寄りにカマドを有し、その平面プランは隅丸の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は12～22cmを測る。覆土は黒褐色土、褐色土の２層を主体とする。床面はほぼ平担であり、床面上北東部にて32×22cmの平面楕円形を呈し、深さ11cmを測るピット、南西壁際にて径23×21cmの平面円形を呈し、深さ９cmを測るピットの計２基を検出した。この２基のピットはその形状、規模よりして柱穴として差し支えないと思われる。なお、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは壁外に24cm程張り出して構築されているもので、遺存状態は良好とはいえず、両ソデについても基底部近くのみの遺存であった。両ソデ部は住居址構築基盤層に近似する灰褐色粘土によって構築されており、左右ソデ部はそれぞれ幅37cm、59cm、長さ88cm、105cmを測る。燃焼部は両ソデ部にかこまれた30×95cmの範囲で確認され、ほぼ平担にて煙道部に継続する。火床面は不鮮明であり、煙道部は20度ほどの傾斜にて壁外に向って立ち上がり、煙出し部に至るものである。煙道部分に径20～50cm大の礫が数個検出されており、また掘り方は166×128cmの範囲にて、床面よりの深さ10cmを測る。

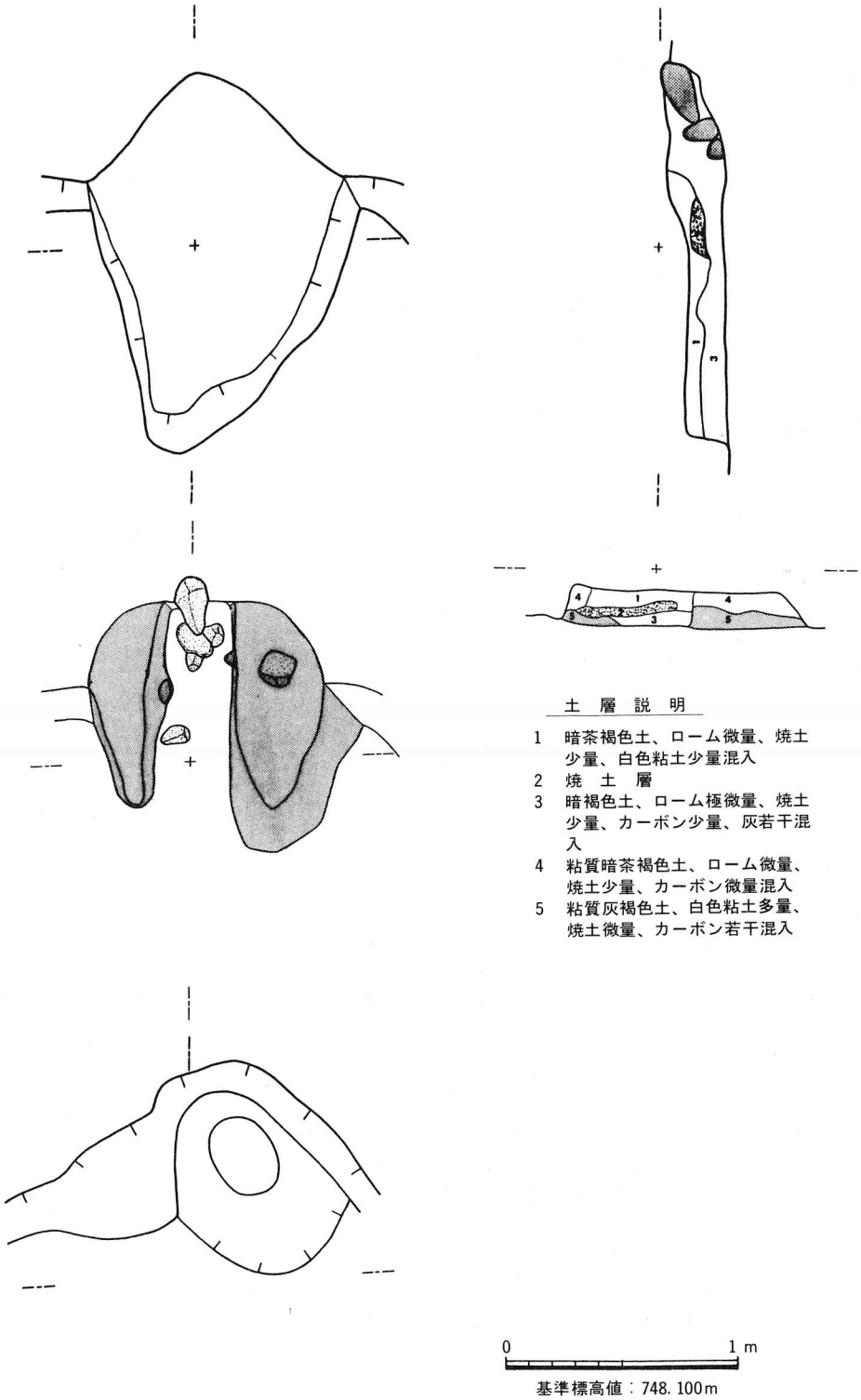
遺物はそれほど多くはなく、住居址中央よりカマド付近に集中して出土しており、実測・図示し得たものは土師器坏１、同甕２、同壺１、内耳土器１の５点で、このうち、土師器坏（１）



土　層　説　明

1　黒褐色土、ローム少量、焼土微量、小礫混入
2　茶褐色土、焼土少量、カーボン微量混入
3　ロームブロック
4　砂質明茶褐色土、ローム多量、小石多量混入
5　暗茶褐色土、ローム少量混入

第4図　第1号住居址



第5図．第1号住居址カマド

は住居址北東部中央寄りの床面上にて、甕と壺の３点はカマド内にて出土した。また、内耳土器（５）は北東隅の覆土最上層より出土しており、直接住居址に伴うものではない。カマド内にて検出された礫は支脚とは考えられず、カマド構築時の補強材と考えられる。

第３号住居址（第６・７図）

第３号住居址はＡ区西側のＬ－５グリット南東部に位置する。主軸を北110度東に採り、壁長は東西南北それぞれ4.48*m*、3.91*m*、4.17*m*、3.81*m*を測る。東壁南寄りにカマドを有し、平面プランは歪んだ方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、緩やかなスロープ上に住居址が立地しているため、北壁高が55*cm*と深く、南壁高が16*cm*と浅い。その南壁高の遺存状態は極めて悪い。覆土は黒褐色土、褐色土、茶褐色土の３層を主体としている。床面は平担であり、床面上南西隅にて径48×31*cm*の平面円形を呈し、深さ６*cm*を測るピット、南東カマド脇に径57×51*cm*の平面円形を呈し、深さ５*cm*を測るピットの計２基が検出された。いずれも柱穴と判断され得るものである。また、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは南東隅の東壁部に壁外にほとんど張り出さずして構築されており、遺存状態は不良で、両ソデ部についても基底部のみの遺存であった。両ソデ部は住居構築基盤層に近い褐色粘土をもって構築されており、補強材として径30*cm*大の礫を使用している。残存するソデ部は左ソデ部が幅85*cm*、長さ70*cm*、右ソデ部が幅80*cm*、長さ94*cm*をそれぞれ測る。燃焼部は両ソデに囲まれた110×85*cm*の範囲で確認され、平担にて煙道部に至っている。火床面は63×47*cm*の範囲で明確に認められた。煙道部は燃焼部とほとんど一体であり、明確にし得ない。掘り方は180×80*cm*の範囲内にて床面よりの深さ20*cm*を測る。カマド内より支脚等は検出されなかった。

遺物は住居址全体に分布しているが、量的にはさほど多くなく、実測・図示し得たものは土師器坏３、蓋１、須恵器甕３の計７点で、（１）～（３）はカマド内にて、残りは覆土下層より出土している。

第４号住居址（第８・９図）

第４号住居址はＪ－５グリットほぼ中央に位置している。主軸を北12度東に採り、壁長は東西南北それぞれ3.98*m*、4.10*m*、4.23*m*、3.68*m*を測り、平面プランは方形を呈する。カマドは本遺跡唯一北壁東寄りに有している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は29～41*cm*を測る。覆土は茶褐色土、黒褐色土、及び褐色土の３層を主体とする。床面は平担で、ピットは４基検出されている。住居址北西隅のものは径30×25*cm*、深さ16*cm*、平面円形を呈する。西壁際中央南寄りに位置するものは径62×90*cm*、深さ32*cm*、平面方形を呈する。南壁際中央に位置するピットは径54×120*cm*、深さ37*cm*、平面楕円形を呈し、ピット中央に50×30*cm*大の礫を含む。南東

隅の１基は径35×62cm、深さ26cm、平面円形を呈する。このうち、北西隅、南東隅の２基は柱穴と判断されるが、他の２基については柱穴というよりはむしろ別の機能を有するものと考えられる。また、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは本遺跡唯一の北カマドであるが、遺存状態は極めて悪く、天井部及び左ソデは失われており、右ソデの補強に使用されたと思われる礫を残すのみである。燃焼部は右ソデ部と左ソデ部の存在が想定される82×58cmの範囲で比較的明瞭に認められ、平担にて煙道部に至ると思われるが、燃焼部と一体であり、明確にし得えない。火床面は55×44cmの範囲内で明確に認められるが掘り方は不明瞭である。

遺物の量は多くなく、土師器、灰釉陶器等出土しているが、いずれも小片であり、実測・図示し得る程のものは出土していない。なお、覆土第２層の黒褐色土中より多量の炭化材が出土している。

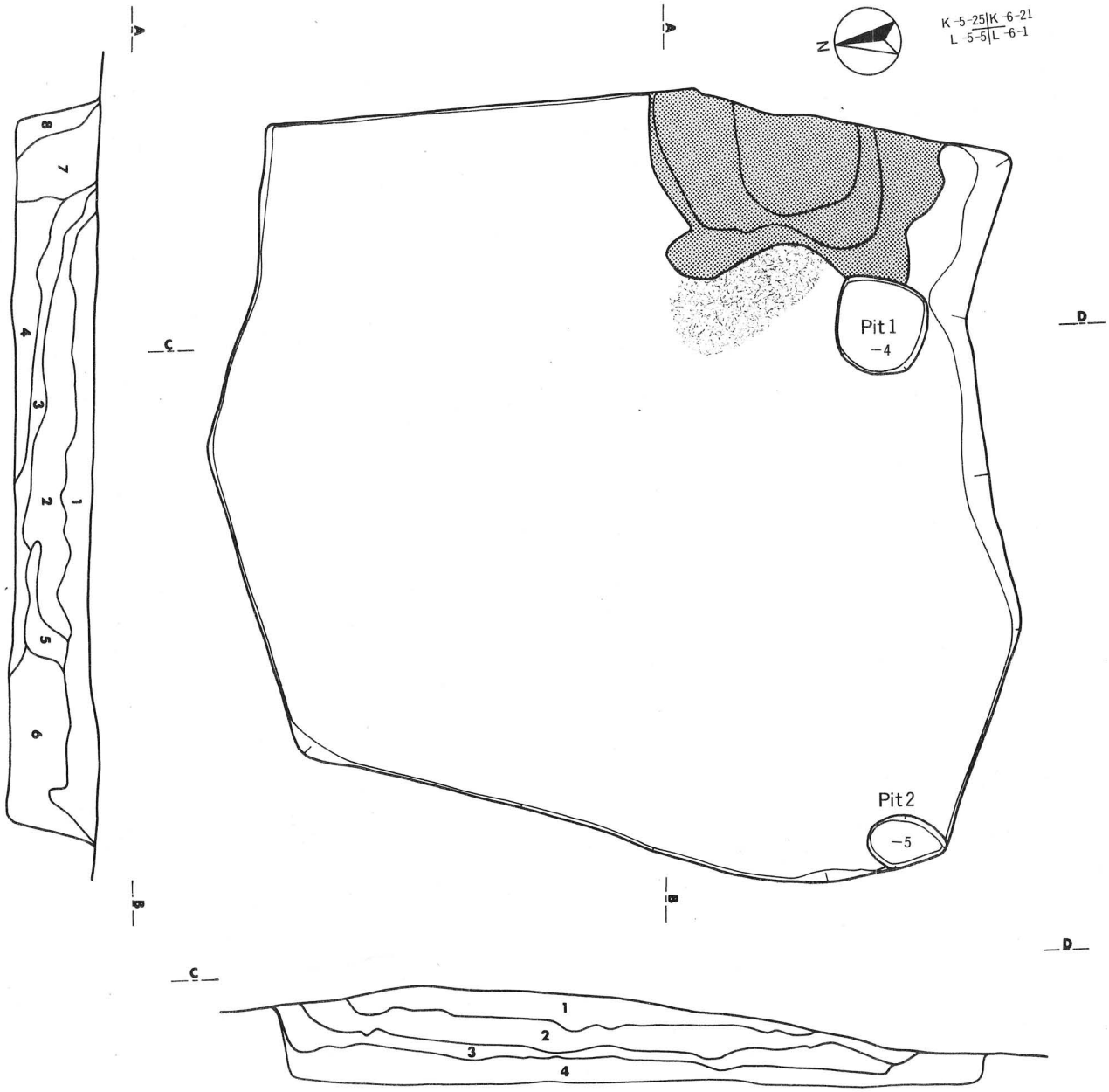
第５号住居址（第10図）

第５・７・８号住居址の３基は中世の所産と考えられ、住居址とは判断し難いものであり、竪穴遺構とすべきものであるが、ここでは一応、住居址としてのナンバーを付し、ここにおいて報告することとする。

第５号住居址はＧ―５グリットほぼ中央に位置し、主軸を北２度東に採る。壁長は東西南北それぞれ4.46m、3.99m、3.75m、3.96mを測り、方形プランを呈する。壁高は16～29cmを測り、床面はほぼ平担であるが、径１m大の巨石が入り込んでいる。こうした例は特に小和田遺跡Ｄ地区において顕著にみられ、同じ尾根に立地する遺跡として興味を引くものである。ピットは13基検出された。これらのピットは巨石の存在する南東隅を除く三隅と、東西南北各壁際中央、そして遺構中央の計８基を中心として遺構内に分散している。このうち中央に位置するものは径126×112cm、深さ15cmを測るもので、残る12基は概ね径20～30cm、深さ15～30cm大を主体とする。小和田遺跡の中世竪穴遺構に顕著に認められた炭化物の堆積はみられず、これは本遺跡における第７・８号住居址においてもいえることであり、小和田遺跡の中世竪穴遺構と比較・検討するうえで、一つの注目される差違である(註)。

遺物は本住居址の性格付けするのみならず、本遺跡そのものの性格付けをするのに不可欠であろう、貴重な資料が出土している。この遺物は銅製碗蓋で、北西部床直上より、上を向いた形で出土している。この他には覆土中より聖宋元宝が出土しているが、それ以外の遺物は土器小片が数点出土しているのみで、実測・図示し得るほどの遺物はない。

註　小和田遺跡については現在整理中であり、現時点においては『小和田館跡発掘調査概報』として発表されている。

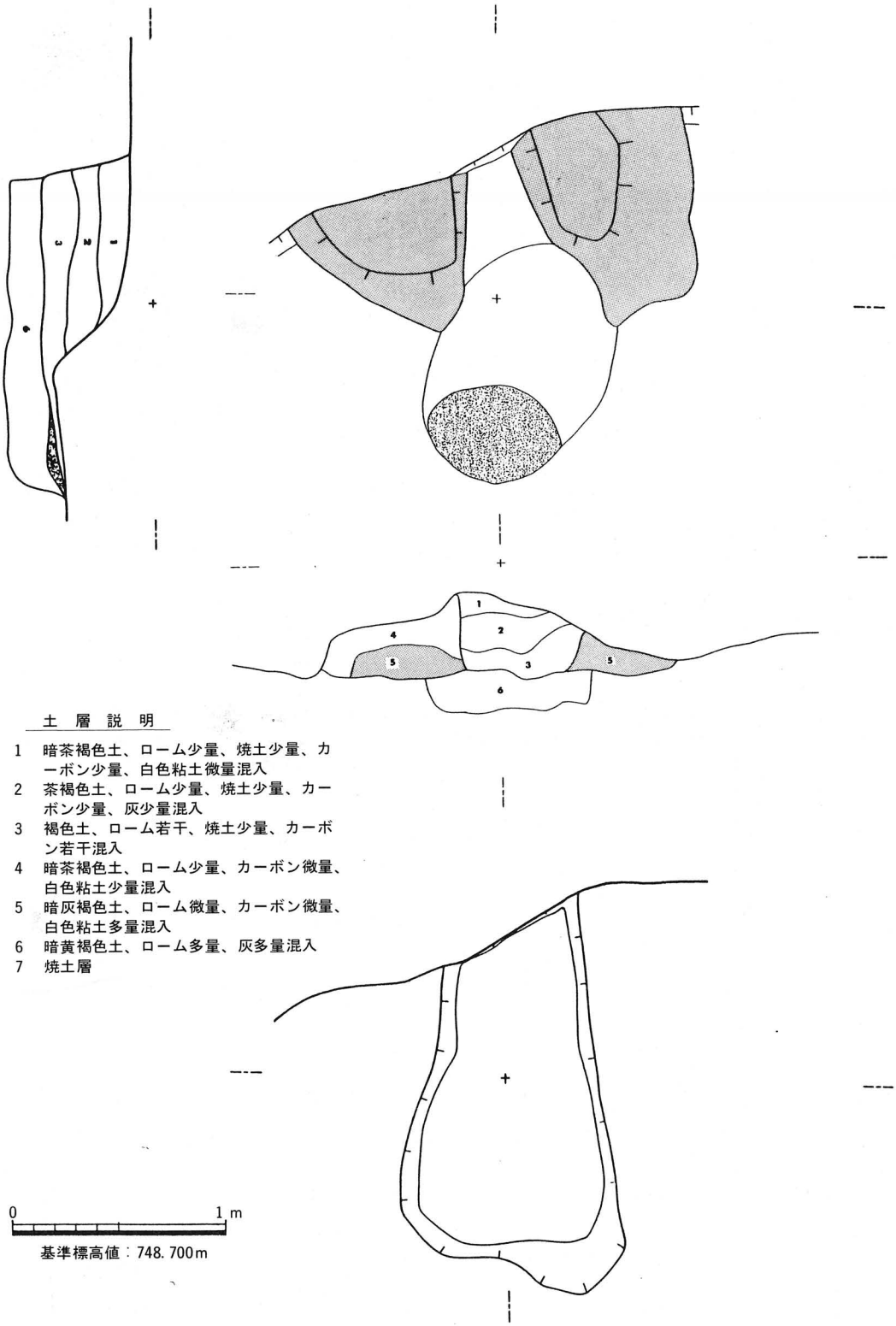


土　層　説　明

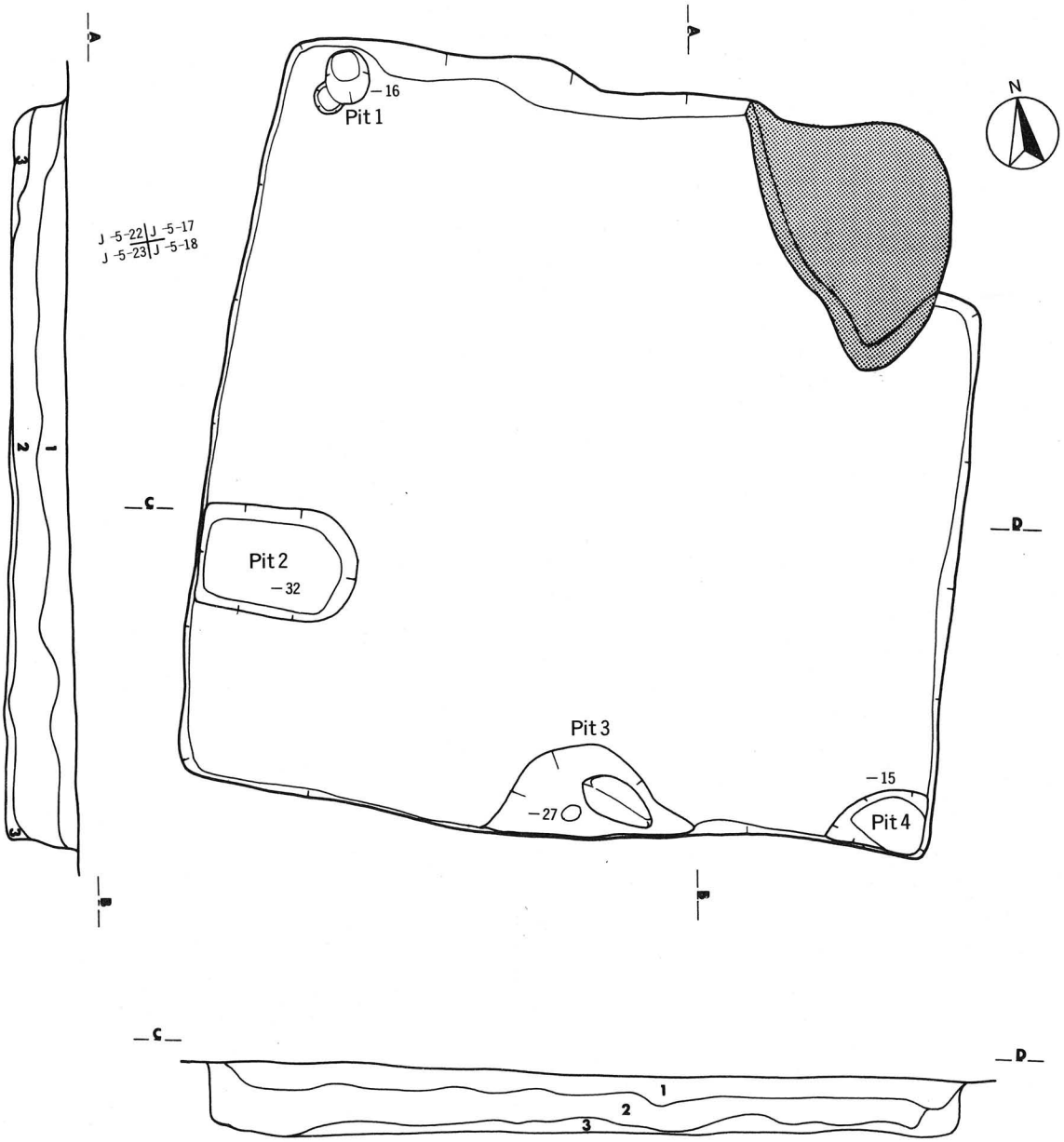
1　黒褐色土、ローム少量、焼土若干、カーボン微量混入
2　暗褐色土、ローム微量、カーボン少量混入
3　茶褐色土、ローム多量、焼土若干、カーボン微量混入
4　暗褐色土、ローム若干、焼土少量、カーボン少量混入
5　褐色土、ローム少量、焼土少量、カーボン少量混入
6　粘質暗茶褐色土、ローム若干、焼土微量、カーボン微量混入
7　明褐色土、ローム多量、焼土少量、カーボン微量混入
8　茶褐色土、ローム少量、焼土微量、カーボン微量混入

0　1 m
基準標高値：749.200m

第6図　第3号住居址



第7図　第3号住居址カマド



土 層 説 明

1　茶褐色土、ローム少量、カーボン若干混入
2　黒褐色土、ローム微量、カーボン多量混入
3　褐色土、ローム少量、カーボン若干混入

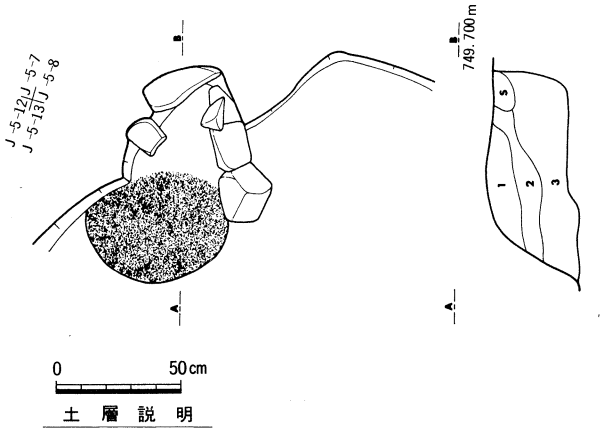
0　1 m
基準標高値：749.700m

第8図　第4号住居址

第７号住居址

（第11図）

第７号住居址はＨ―８グリット南西部に位置し、主軸を北26度西に採る。平面プランは長方形を呈し、東壁中央は第52号土坑により切られている。壁長は東西南北それぞれ3.97*m*、3.58*m*、3.08*m*、3.12*m*を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は17～22*cm*を測る。床面は平担であり、ピットは14基検出されている。平均して径20～30*cm*、深さ10～30*cm*大のものが主体をなすが、第５号住のよう明確な規則性をもたず、遺構内に分散しているが、そうした中でも南東隅を除く三隅のものはその形状・規模よりして柱穴と考えられる。周溝等の付帯施設は認められない。



第９図　第４号住居址カマド

遺物は覆土中より嘉祐元宝が出土しており、またピット８より石鏃が１点、覆土中より青磁片が出土している他は実測・図示し得るものの出土はない。

第８号住居址（第12図）

第８号住居址はＨ―７グリット南東部に位置し、主軸を北47度東に採る。北壁を53号土坑により切られている。壁長は東西南北それぞれ2.57*m*、2.30*m*、3.66*m*、2.78*m*を測り、台形ぎみの方形プランを呈する。壁はほとんど垂直であり、壁高は35～42*cm*を測る。床面は平担であり、ピットは10基検出されている。これらのピットも第７号住居址同様、第５号住居址のような明確な規則性はもたない。その中でピット１、２、３、６、７の５基はまるで土坑の如き様相を呈し、第５・７号住居址におけるピットとは区別されるべきかもしれないが、概ね径20～50*cm*、深さ30～50*cm*大のものである。

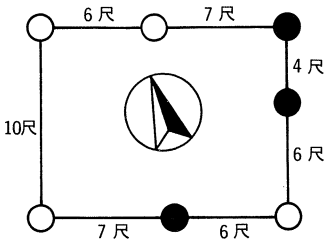
遺物はほとんどが小片であり、実測・図示し得たものはわずかに刀子１本である。図示していないが、内耳土器片の出土もみられる。

第２節　掘立柱建物址

掘立柱建物址はＢ区にて１棟検出されており、Ａ区においては検出されなかった。

第１号掘立柱建物址（第13図）

第１号掘立柱建物址はＢ区中央、Ｑ・Ｒ－６グリット北側に位置し、主軸を北100度西に採る東西棟の建物である。２間×２間で梁行3.88m（13尺）、桁行3.00m（10尺）の長方形を呈する。柱穴は７基検出され、西側部のみ１間である。柱間は梁行間が1.73m（６尺）～2.15m（７尺）、桁行間が1.15m（４尺）～1.85m（６尺）である。南北の柱間を比較すると北側が東より７尺－６尺の間隔であるのに対し、南側は東より６尺－７尺と点対称の位置にあり、また東側柱間も４尺－６尺と北に片寄っており、柱穴は検出されなかったものの３間×３間であったとも考えられる。



模　式　図

掘り方は７基のうち３基に柱痕が認められる。覆土はピット１、２、３がローム少量、カーボン微量混入暗褐色土であり、ピット４～７では下層部に粘質暗茶褐色土が含まれている。

遺物の出土はみられなかった。

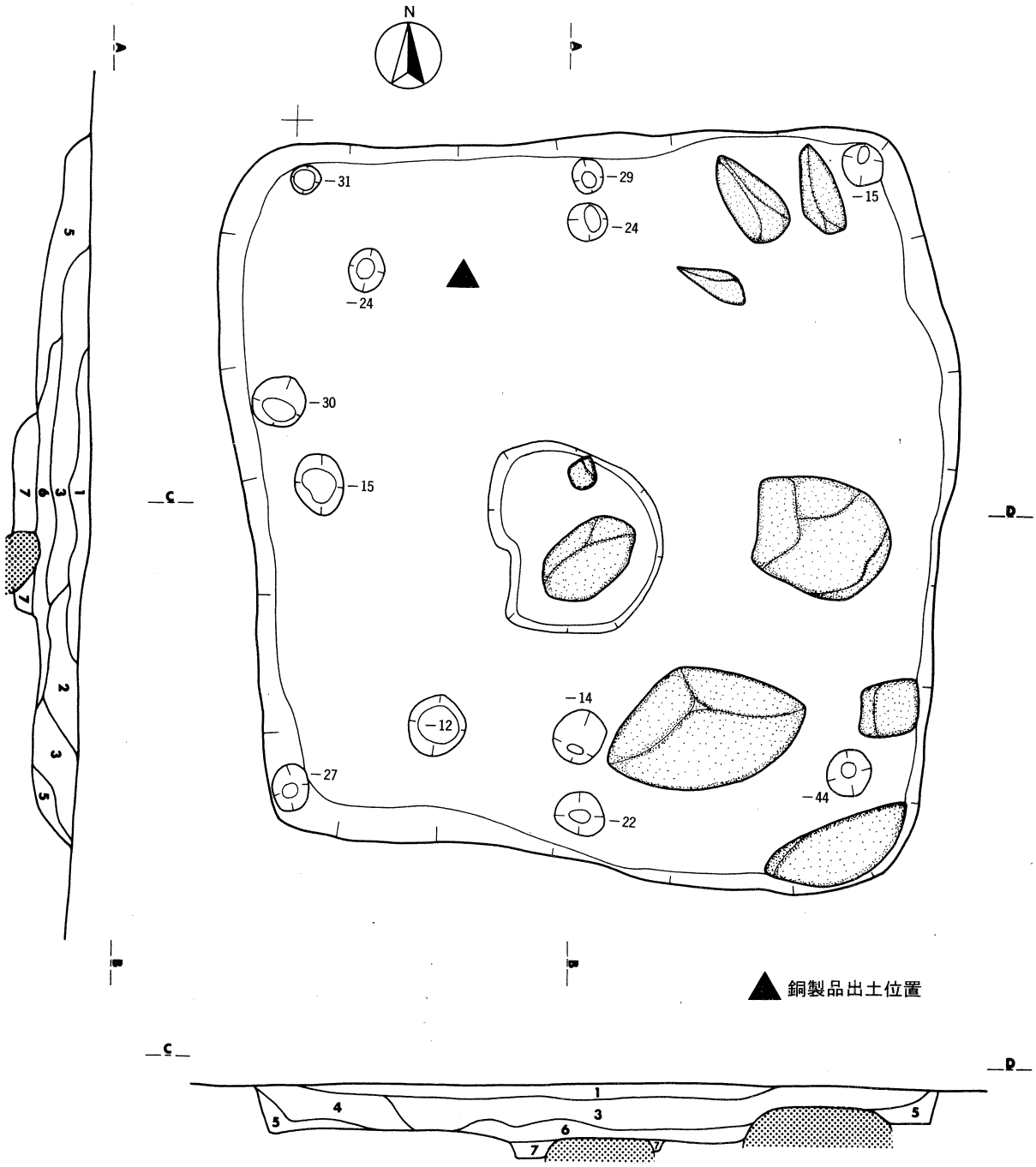
第３節　　溝

溝はＢ区にて１条検出されているのみで、Ａ区においては検出されていない。

第１号溝（第14図）

本溝はＢ区北側、第１号住居址の南２m、Ｐ－４グリットからＱ－４グリットにかけて南西から北東に向って走るもので、Ａ区とＢ区との間の南北に流れる小川に注いでいる。長さ14mを測り、幅は最小75cm、最大116cm、深さ40～60cmをそれぞれ測る。溝壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面台形を呈し、底面はなだらかである。覆土はカーボンを混入する粘質褐色土、茶褐色土の２層を主体としている。

出土遺物は天聖元宝が２枚重なって出土した他は中世陶器片、砥石剝片等があるが、古銭を

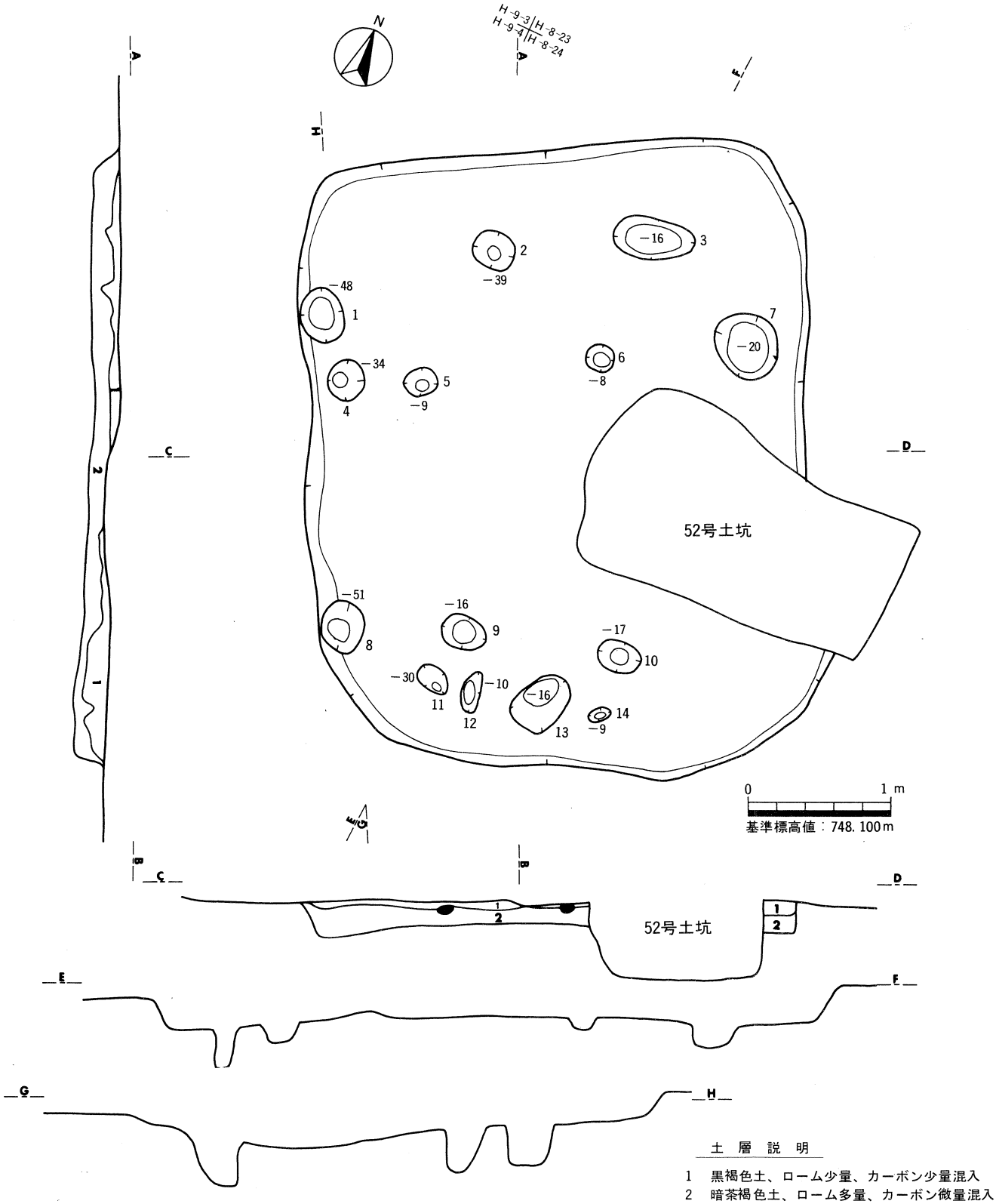


土　層　説　明

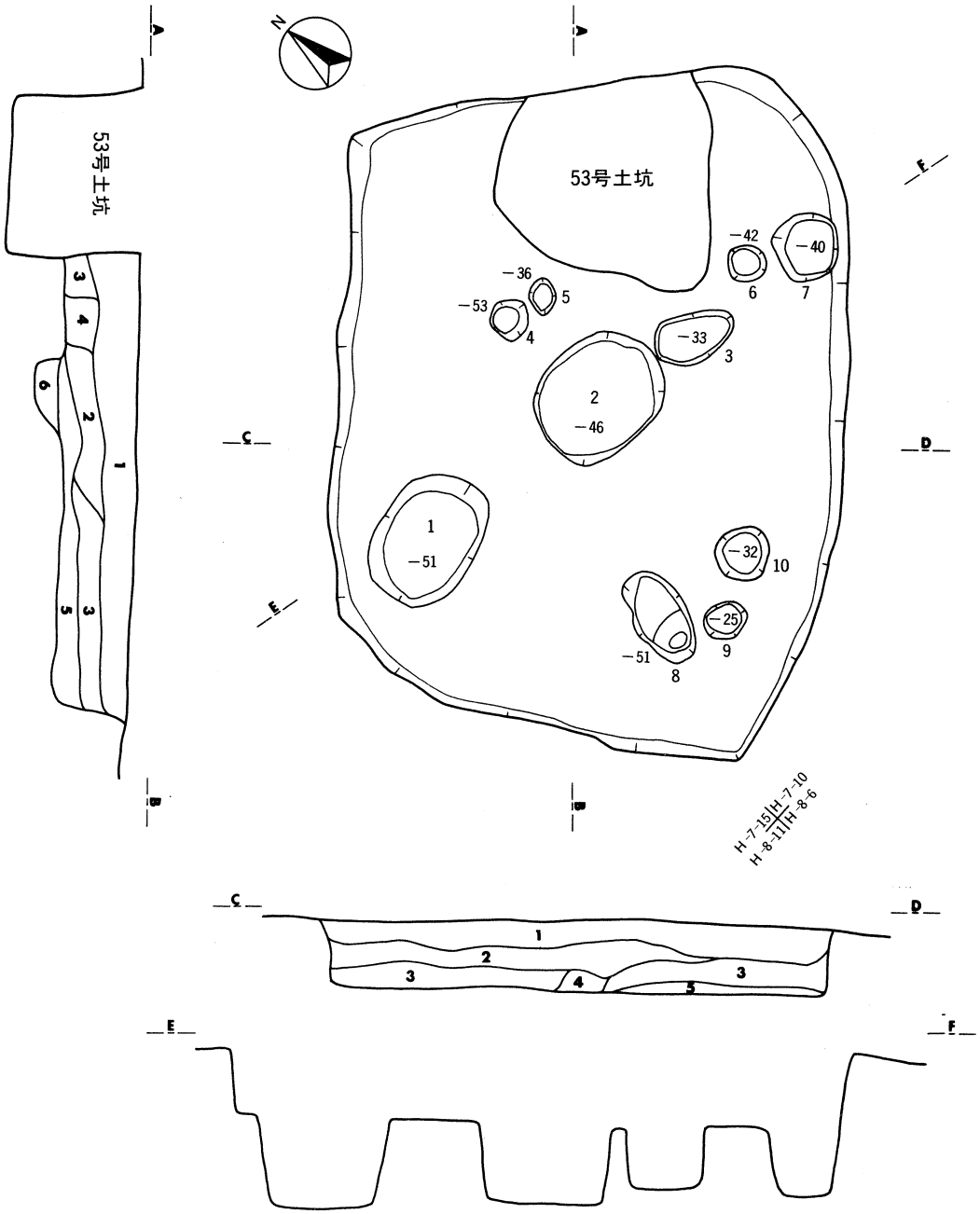
1　明灰褐色土、ローム少量、白色粘土多量混入
2　灰褐色土、ローム少量、カーボン極微量、白色粘土多量混入
3　暗灰褐色土、ローム少量、白色粘土多量混入
4　灰褐色土、ローム少量、白色粘土多量混入
5　茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
6　粘質暗褐色土、ローム微量、カーボン多量混入
7　暗茶褐色土、ローム少量、カーボン多量混入

0　1 m
基準標高値：749.600m

第10図　第5号住居址


N
H-9-3 H-8-23
H-9-4 H-8-24
52号土坑
52号土坑
0 1 m
基準標高値：748.100m
土 層 説 明
1 黒褐色土、ローム少量、カーボン少量混入
2 暗茶褐色土、ローム多量、カーボン微量混入

第11図　第７号住居址

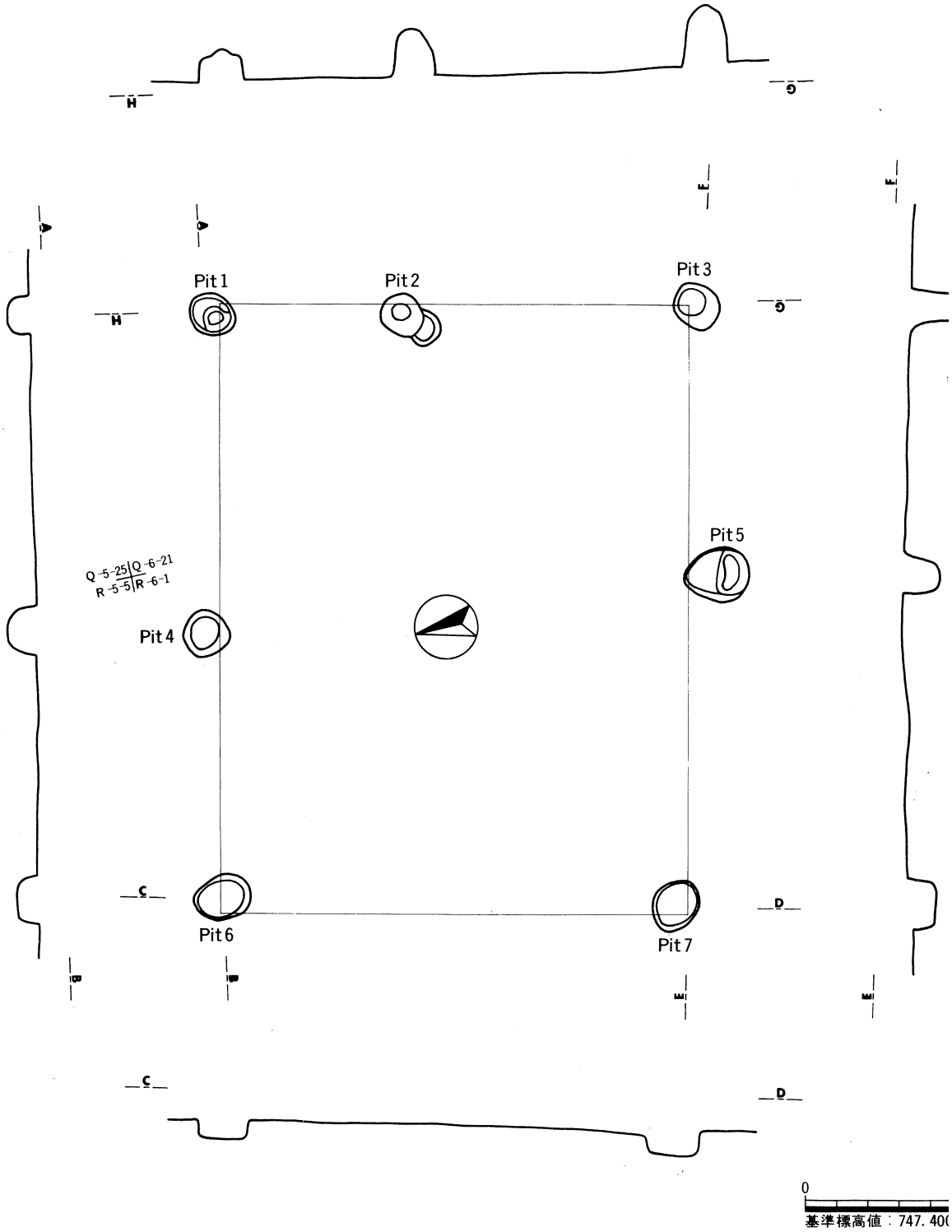


0　1 m
基準標高値：748.300m

土　層　説　明

1　茶褐色土、ローム少量、焼土少量、カーボン若干混入
2　褐色土、ローム少量混入
3　褐色土、ローム少量、焼土若干、小礫多量混入
4　暗茶褐色土、ローム微量、カーボン少量混入
5　明茶褐色土、ローム多量混入
6　暗褐色土、ローム少量、カーボン極微量混入

第12図　第８号住居址



第13図　第１号掘立柱建物址

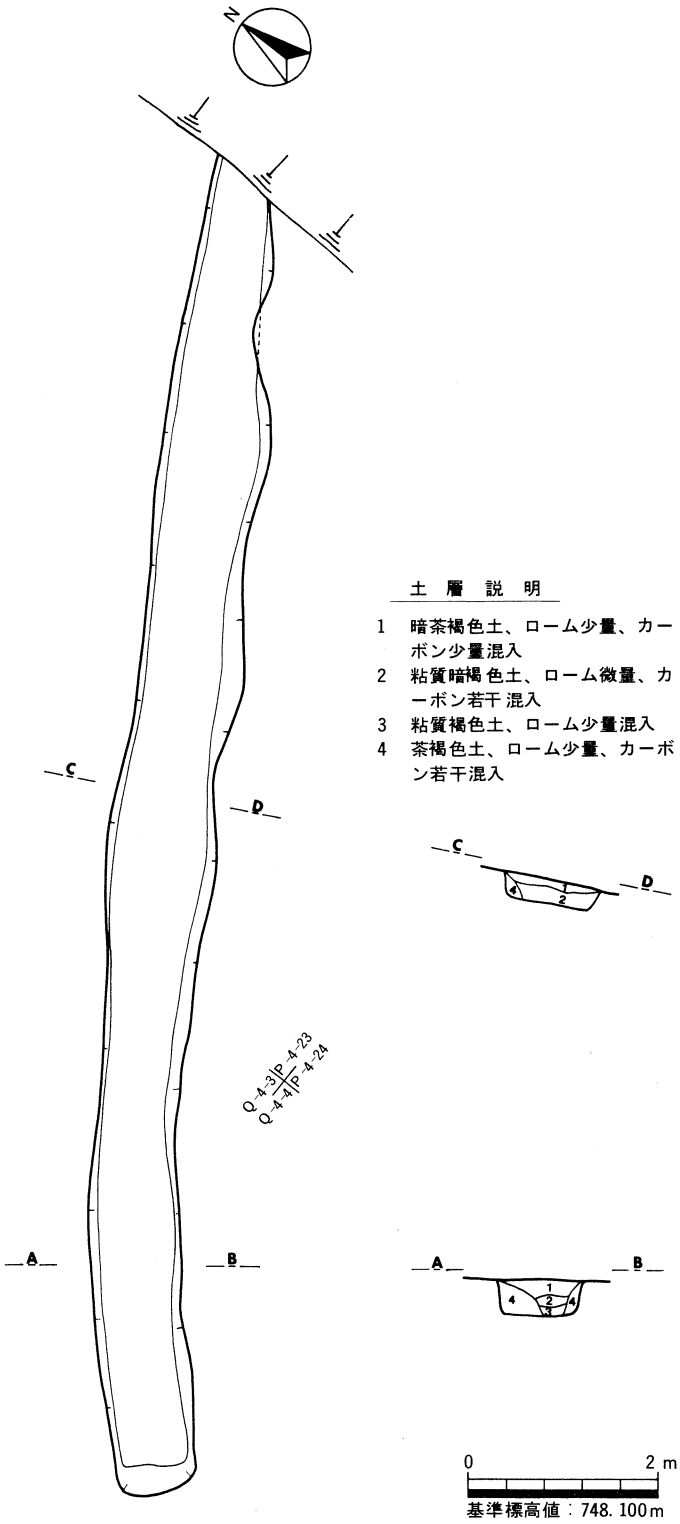
除き、いずれも小片であり、実測・図示し得るほどのものはなかった。

第4節
集石遺構

ここでいう集石遺構とは、中世の集石と集石土坑をいう。中世集石はA区にて1基検出され、集石土坑はB区にて1基、A区にて3基が検出されている。

第1号集石
（第15図）

第1号集石はI－6グリット南西部に位置し、径3～30cm大の礫をもって4.5m×3.2mの範囲をもつものである。石は深さ20cm程の掘り込み内に置かれている。掘り込みは歪んだ楕円形を呈し、底面は径1m大の巨石が顔を出している。覆土は茶褐色土を主体とし、カーボンが若干混入している。出土遺物は本



第14図　第1号溝

遺跡内においては比較的豊富で、かわらけ、内耳土器、陶器、石臼、五輪塔が出土しており、このうち実測・図示し得たものはかわらけ４個体、石臼２個、石擂鉢２個、五輪塔空輪部及び風輪部２体、五輪塔水輪部１体の計11点である。この中で五輪塔が出土していることは注目すべき事象であり、本遺構の性格を知るうえで看過できないものである。

第４号土坑（第16図）

第４号土坑はＢ区西側、Ｒ－４グリットの東側に位置する。径1.5*m*×1.7*m*の平面円形を呈し、掘り込みはテラスをもち、深さ52*cm*を測る。土坑内全体に径30～40*cm*大の礫を配するが、礫の配置に特に規則性はみられない。覆土は黒色土を主体とする。出土した遺物は内耳土器片数点であり、実測・図示し得る程のものはない。

第28号土坑（第17図）

第28号土坑はＡ区南端、Ｈ－10グリット南側に位置する。径2.53*m*×2.94*m*の平面不整円形を呈し、壁はほぼ垂直である。礫は20～40*cm*大のものを土坑南東壁際を中心に配されており、特に壁際においては規則正しく並んでいる。掘り込みの深さは35*cm*を測る。覆土はカーボンを含む暗褐色土である。遺物の出土はみられなかった。

第43号土坑（第18図）

第43号土坑はＡ区東側南寄り、Ｇ－９グリット北側ほぼ中央に位置し、径2.40*m*×3.26*m*の平面楕円形を呈するもので、掘り込みの深さは42*cm*を測る。土坑内に径10～70*cm*大の礫が配されており、覆土は上層が褐色土、下層が暗茶褐色土でいずれも若干量のカーボンを混入する。出土遺物は馬歯、古銭（聖宋元宝）１枚が出土している。

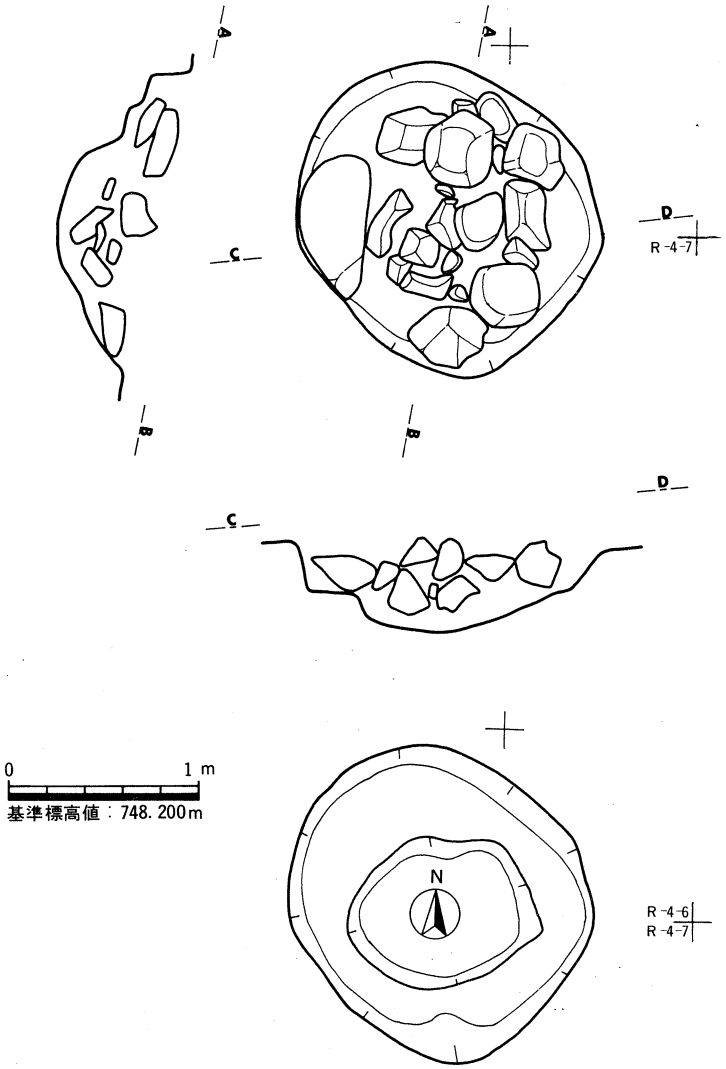
第51号土坑（第19図）

第51号土坑はＡ区南側、Ｇ－９グリット中央やや南西寄りに位置する。径96*cm*×103*cm*の平面円形を呈し、周囲に径15～30*cm*大の礫を配するもので、掘り込みの深さは15*cm*と他の集石土坑と比較するとはるかに浅いものである。遺物の出土はみられなかった。

第15図　第１号集石

第５節
地下式土壙

本遺跡より地下式土壙はＡ区南側より２基が検出されている。これは小和田館跡において検出されたものと比べるとはるかに少ない量である。以下、各土壙について記述してみる。



第16図　第４号土坑

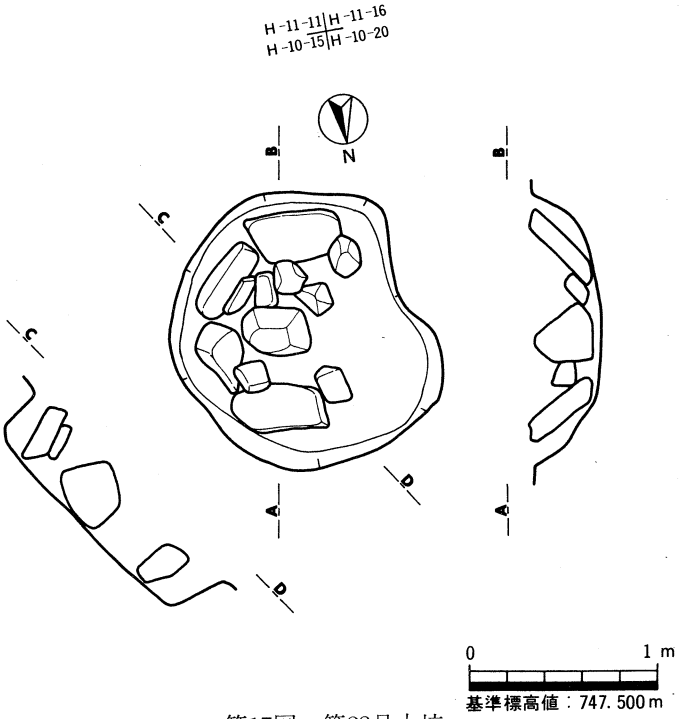
第13号土坑（第20図）

第13号土坑はＡ区南西隅のＬ－８グリット南西隅に位置する。平面プランは一辺2.36*m*×2.57*m*のほぼ正方形を呈し、深さ91*cm*を測る。覆土は５層より成り、粘質の土層である。天井部は崩落しているが、セクションの上からは確認されなかった。一般の地下式土壙にみられるような円形プランを呈する入口部は付属していない。従って主軸方向は定かではないが、仮に短辺方向をとってみると北１度西となる。出土遺物は土師器片、須恵器片、中世陶器片がみられるが、いずれも覆土中よりのものであり、直接本遺構に伴うものではないと考えられる。

第44号土坑（第20図）

第44号土坑はＡ区南側、Ｈ－９グリット中央やや南寄りに位置する。玄室と入口部は明確に

区別される。玄室部は110cm×186cmの角のとれた方形プランを呈し、深さは80cmを測る。入口部は径90cm×90cmの半円形を呈している。天井部は崩落しているが、セクションより崩落土は確認されない。主軸は北9度東に採る。床面は平担であり、入口部とはわずかながら段差を有する。出土遺物はほとんどなく、覆土中より土器片が若干出土しているのみである。



第17図　第28号土坑

第6節　土　坑

本遺跡においては、A区にて34基、B区にて10基の計44基の土坑が検出されている。計測値等は表1にまとめて記してあるので、ここではそのうち注目される土坑について述べてみたい。

第6号土坑（第22図）

本遺構はその形状・規模より他の土坑とは異なる性格が想定されるもので、むしろ地下式壙に近いものかもしれない。陶器片が数点出土しているが、実測・図示し得るほどのものはない。

第23～27号土坑（第25図）

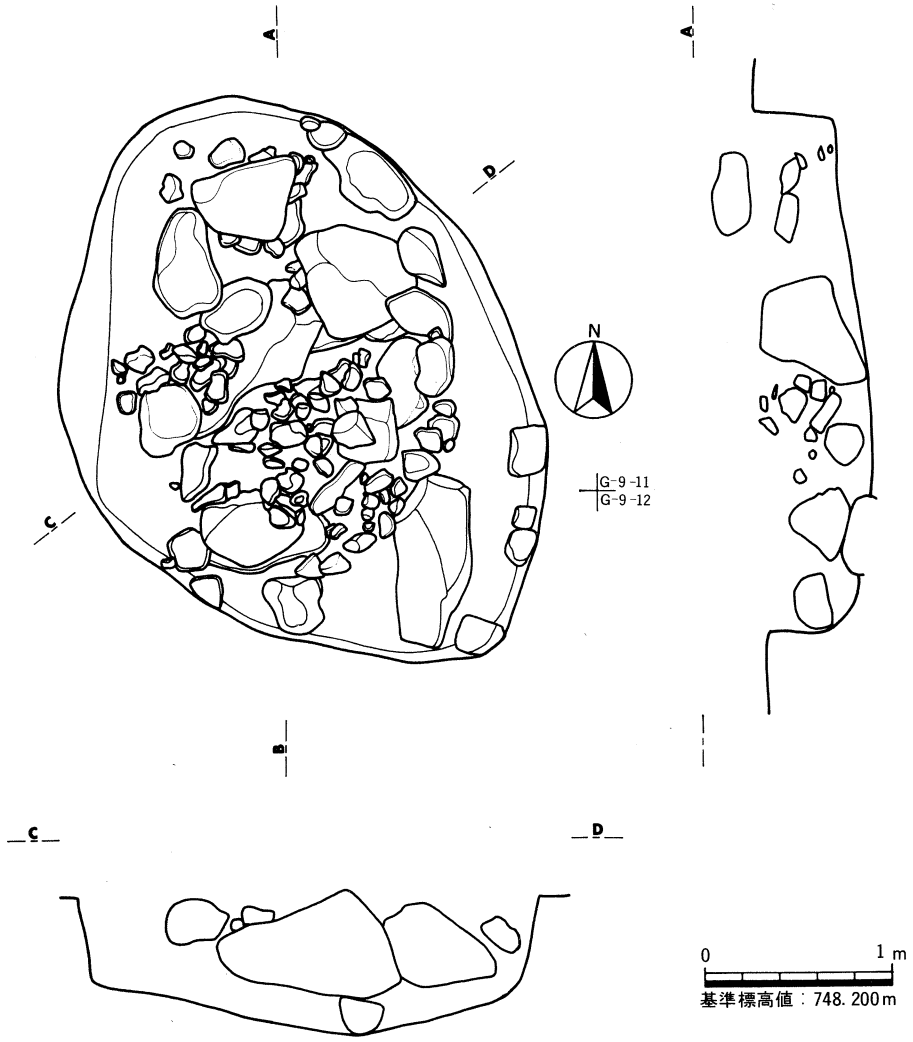
この5基の土坑はその形状・規模が類似するもので、27号を除き覆土も共通しており、注目される一群である。しかし、遺物の出土はなく、またその配置にも規則性はみられない。

第37号土坑（第27図）

おそらく複数の土坑が切り合って存在したものかもしれない。土坑内には巨石が入り込んでいる。青磁片、古銭2（熙寧元宝、他の1枚は不明）、陶器片が出土しており、注目される。

第46～50号土坑（第29図）

G—8グリットに位置する土坑群で、49号が他に先行するものと考えられる。46号より古銭

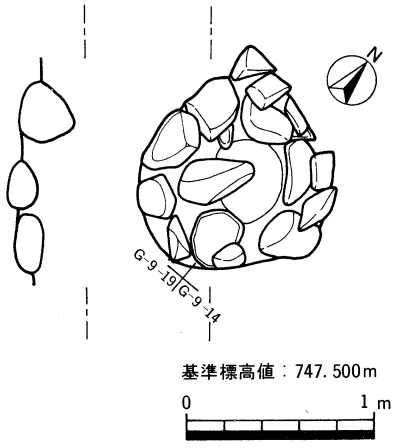


第18図　第43号土坑

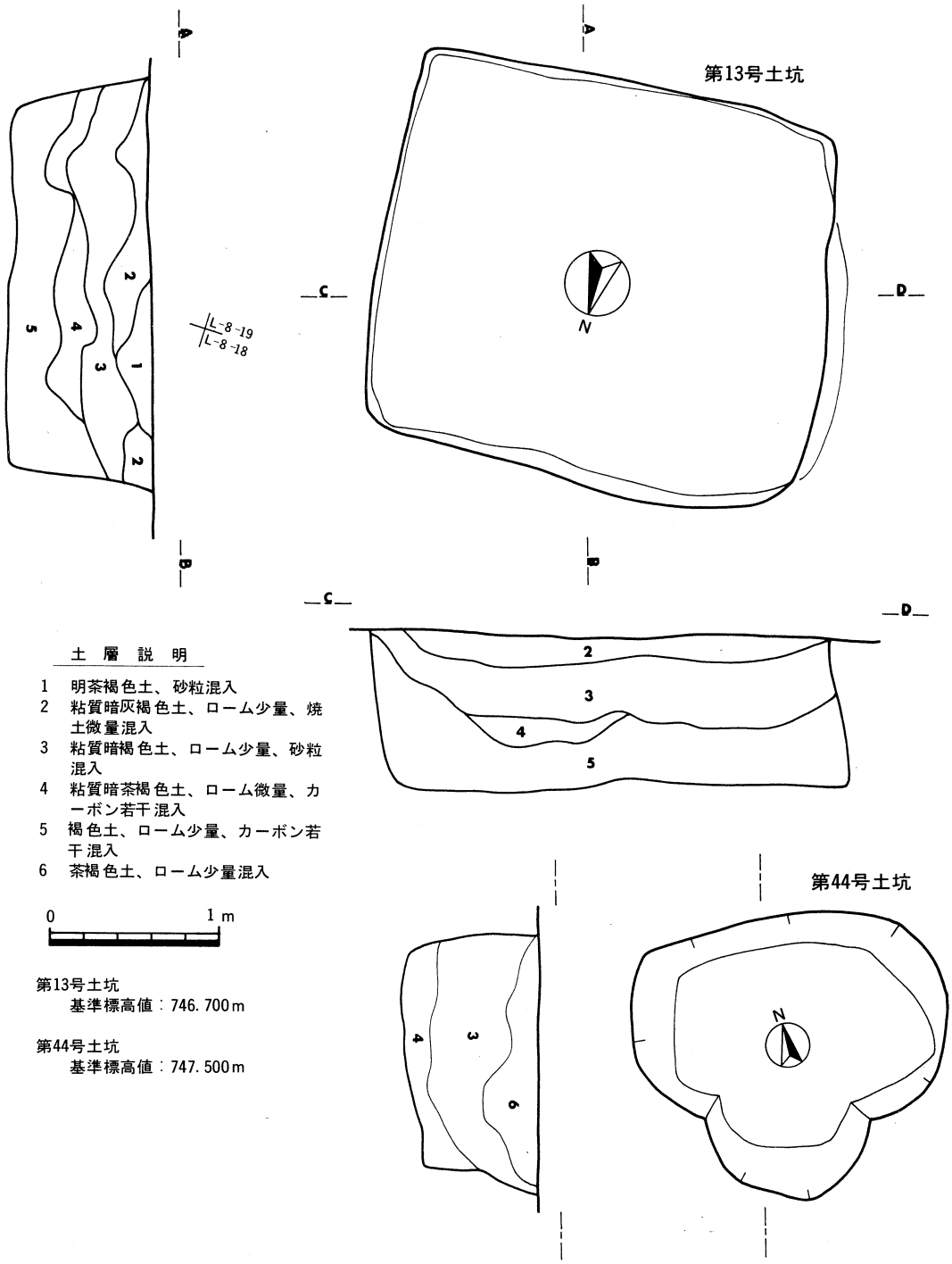
が出土している。

第7節　ピット群

ピットはH—8・9、I—8、Q—5グリッドにおいて51基を検出した。各ピットの計測値は別表の通りである。確認時において明確なる規則性を見出せず、個別に調査を行なった。全体で土器片数点が出土したのみで、その所産時期・性格を明確にする程の遺物の出土はみられなかった。



第19図　第51号土坑



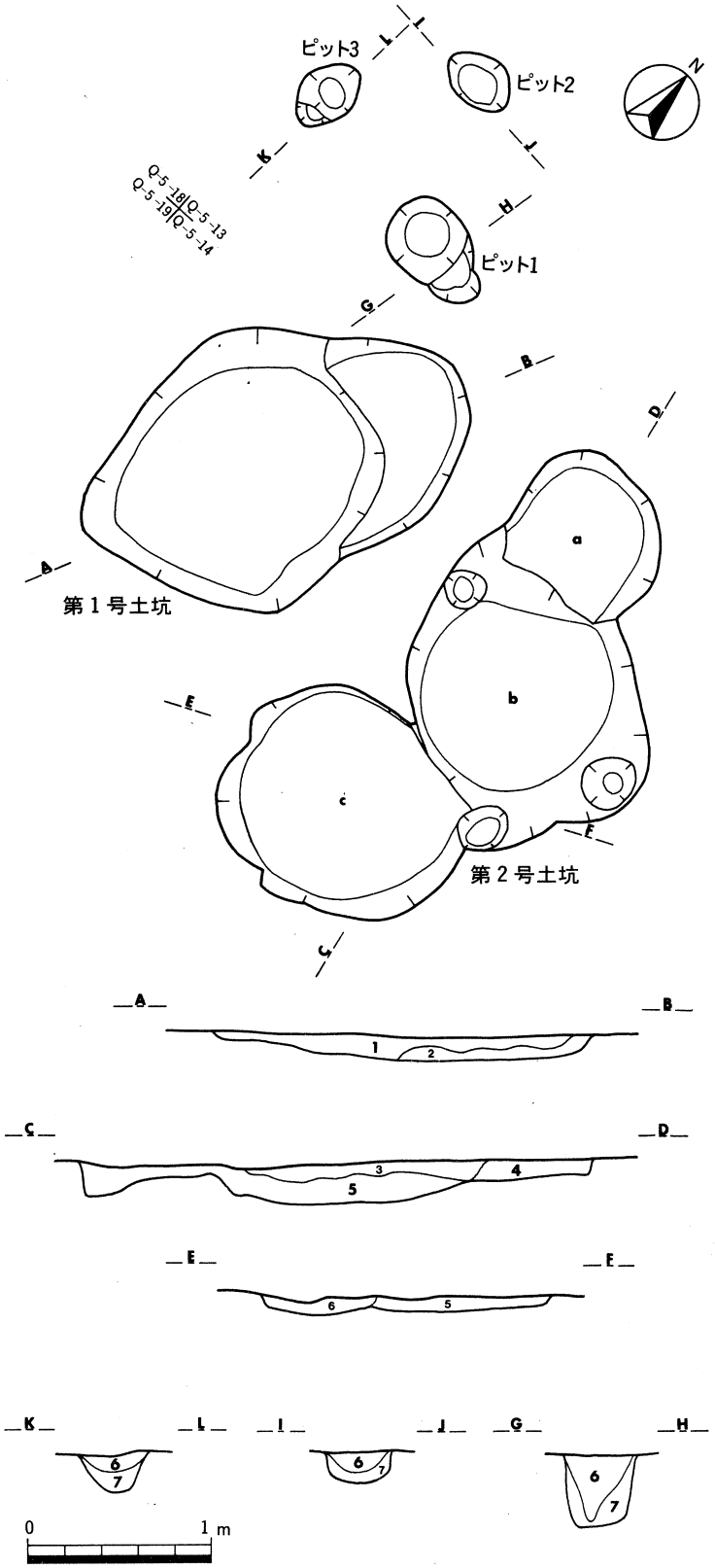
土　層　説　明

1　明茶褐色土、砂粒混入
2　粘質暗灰褐色土、ローム少量、焼土微量混入
3　粘質暗褐色土、ローム少量、砂粒混入
4　粘質暗茶褐色土、ローム微量、カーボン若干混入
5　褐色土、ローム少量、カーボン若干混入
6　茶褐色土、ローム少量混入

第13号土坑
基準標高値：746.700m

第44号土坑
基準標高値：747.500m

第20図　第13・44号土坑

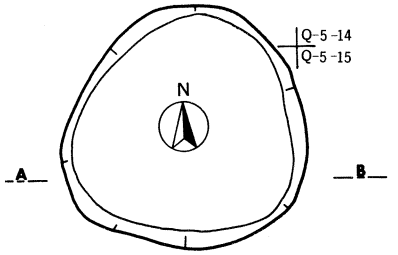


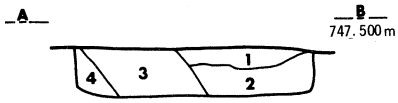
土　層　説　明

1　黒褐色土、ローム微量、カーボン微量、スコリア微量混入
2　粘質黒褐色土、ローム通量、カーボン少量混入
3　明褐色土、ローム少量混入
4　粘質暗茶褐色土、ローム少量、焼土微量混入
5　粘質暗褐色土、ローム少量混入
6　粘質褐色土、ローム少量混入
7　粘質暗褐色土、ローム多量混入

第21図　第1・2号土坑　ピット1・2・3

第３号土坑

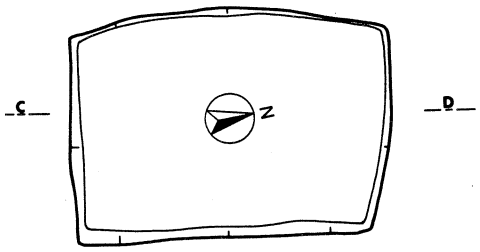


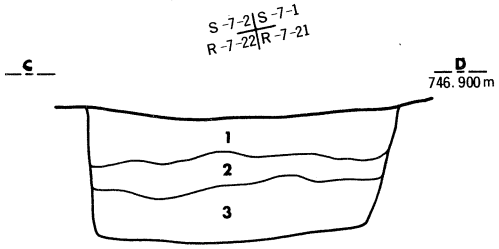


土　層　説　明

1　暗茶褐色土、ローム少量、小礫混入
2　粘質暗褐色土、ローム少量混入
3　粘質褐色土、ローム多量、小礫多量混入
4　砂質褐色土、ローム少量混入

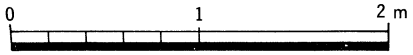
第６号土坑



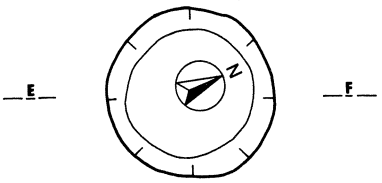


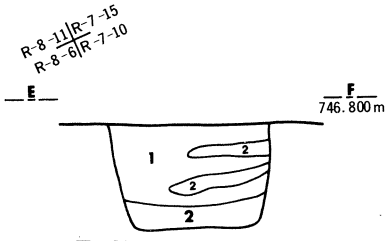
土　層　説　明

1　粘質褐色土、ローム少量、焼土微量、カーボン少量混入
2　粘質茶褐色土、ローム多量混入
3　粘質暗褐色土、ローム微量混入



第７号土坑

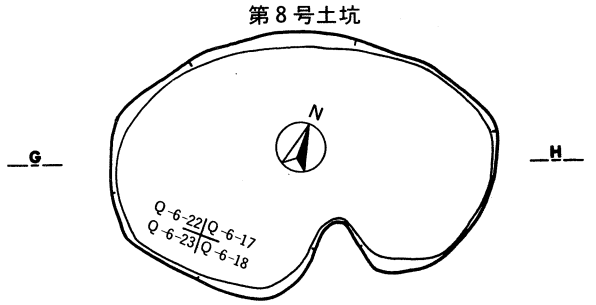


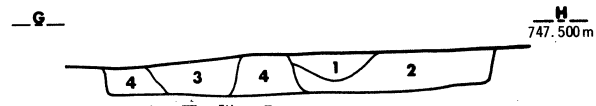


土　層　説　明

1　粘質灰褐色土、ローム少量、スコリア少量混入
2　粘質暗褐色土、ローム少量混入

第８号土坑

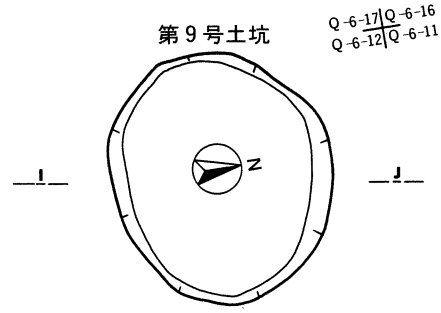


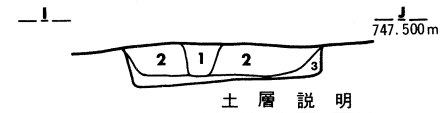


土　層　説　明

1　褐色土、ローム少量混入
2　暗褐色土、ローム少量混入
3　暗茶褐色土、ローム少量混入
4　粘質褐色土、ローム少量、スコリア若干混入

第９号土坑



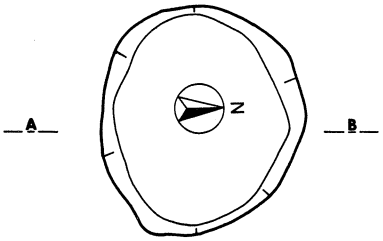


土　層　説　明

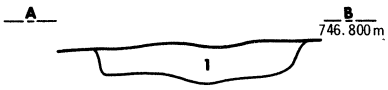
1　暗茶褐色土、ローム少量混入
2　褐色土、ローム少量混入
3　暗褐色土、ローム少量混入

第22図　第３・６・７・８・９号土坑

第10号土坑



R-8-1 | R-7-5
Q-8-21 | Q-7-25

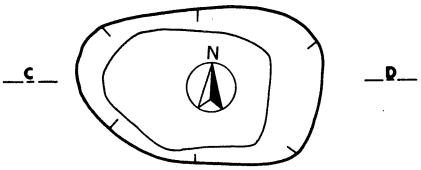


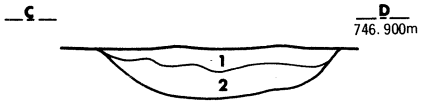
土　層　説　明

1　暗褐色土、ローム少量混入

第11号土坑

Q-7-21 | Q-7-16
Q-7-22 | Q-7-17

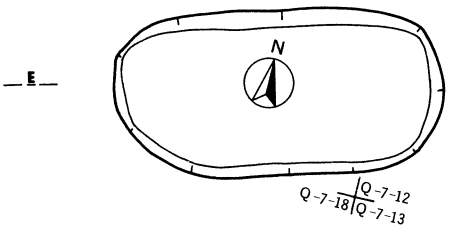


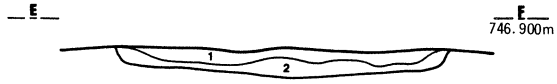


土　層　説　明

1　粘質暗赤褐色土、ローム微量、スコリア少量混入
2　暗褐色土、ローム少量混入

第12号土坑



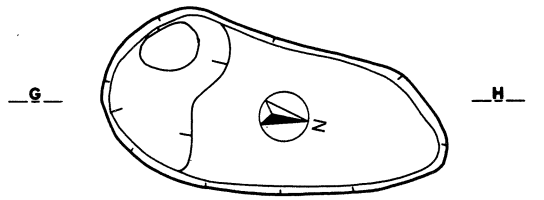


土　層　説　明

1　粘質暗赤褐色土、ローム微量、スコリア少量混入
2　暗褐色土、ローム少量混入

第14号土坑

J-5-1 | J-4-5
I-5-21 | I-4-25

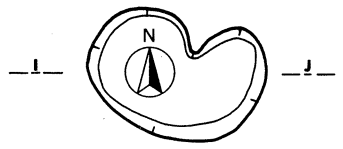


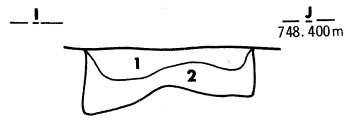
土　層　説　明

1　黒褐色土、ローム微量、焼土若干、カーボン少量混入
2　褐色土、ローム少量、焼土極微量、カーボン微量混入
3　茶褐色土、ローム多量、カーボン極微量混入

第15号土坑

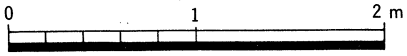
J-6-18 | J-6-13
J-6-19 | J-6-14





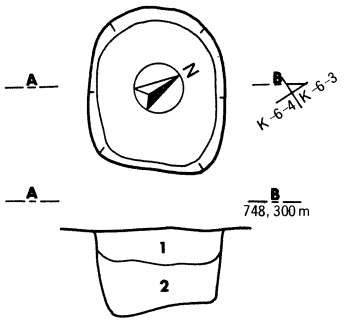
土　層　説　明

1　粘質黒褐色土、ローム少量、カーボン極微量混入
2　粘質褐色土、ローム多量混入



第23図　第10・11・12・14・15号土坑

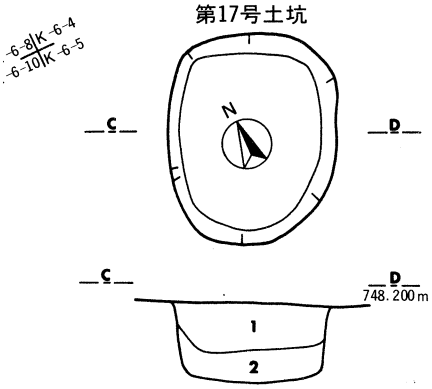
第16号土坑



土　層　説　明

1　粘質黒褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
2　褐色土、ローム多量混入

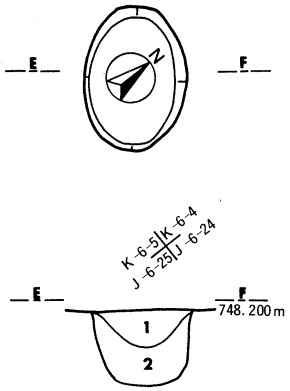
第17号土坑



土　層　説　明

1　粘質黒褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
2　褐色土、ローム多量混入

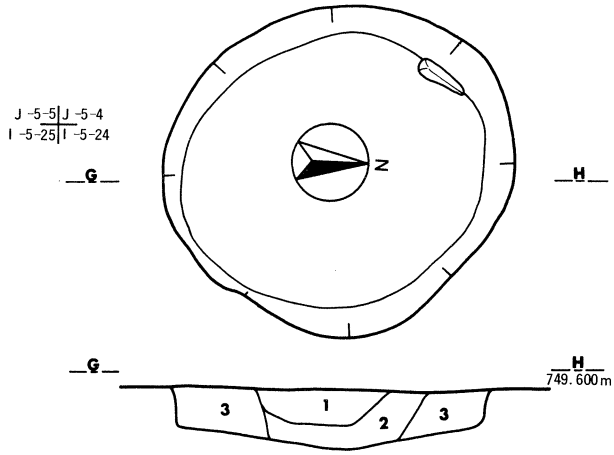
第18号土坑



土　層　説　明

1　粘質黒褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
2　褐色土、ローム多量混入

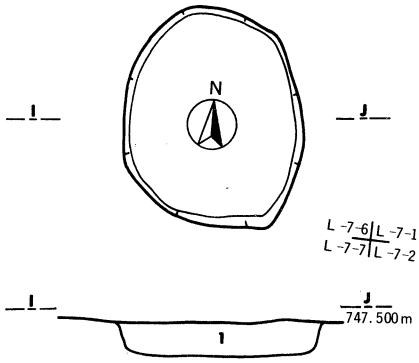
第19号土坑



土　層　説　明

1　粘質暗褐色土、ローム微量、小礫混入
2　粘質褐色土、ローム少量、小礫混入
3　褐色土、ローム少量混入

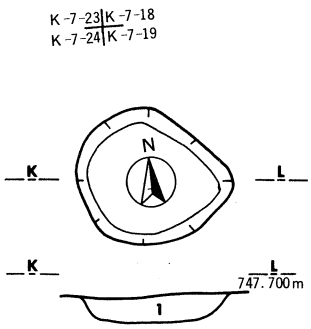
第20号土坑



土　層　説　明

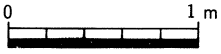
1　暗褐色土、ローム少量、ロームブロック混入

第22号土坑

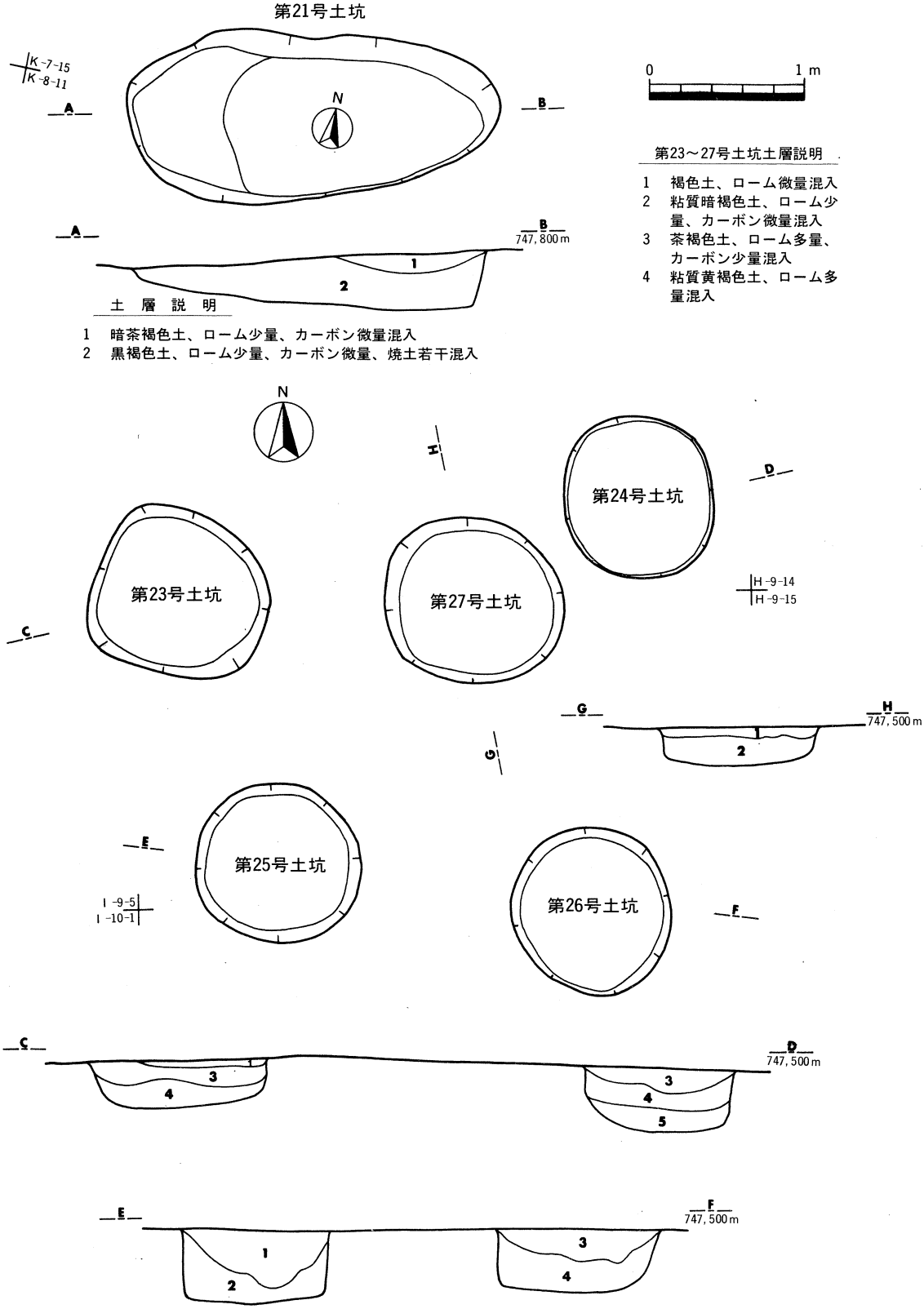


土層説明

1　灰褐色土、ローム少量混入

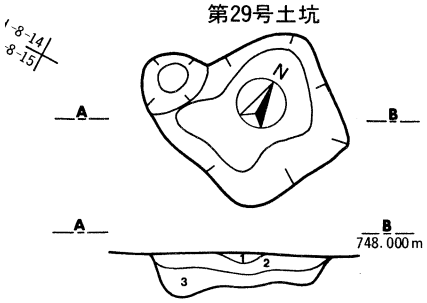


第24図　第16・17・18・19・20・22号土坑



第25図　第21・23・24・25・26・27号土坑

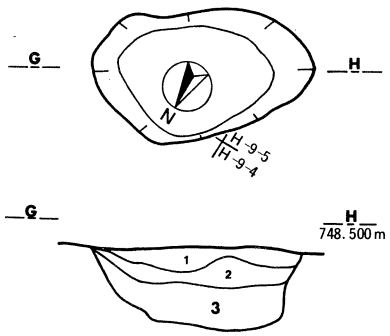
第29号土坑



土　層　説　明

1　赤褐色焼土層
2　褐色土、ローム少量混入
3　暗茶褐色土、ローム多量混入

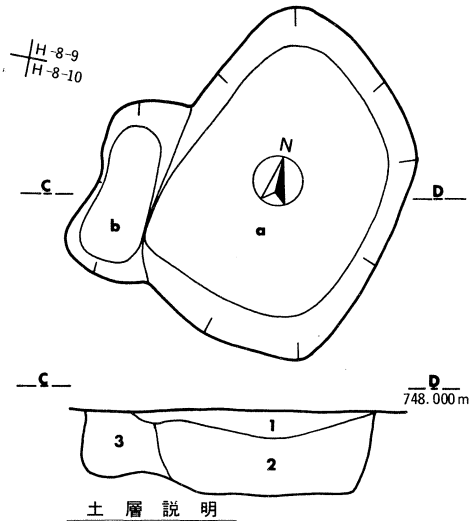
第32号土坑



土　層　説　明

1　褐色土、ローム微量混入
2　明褐色土、ローム多量、焼土微量混入
3　茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入

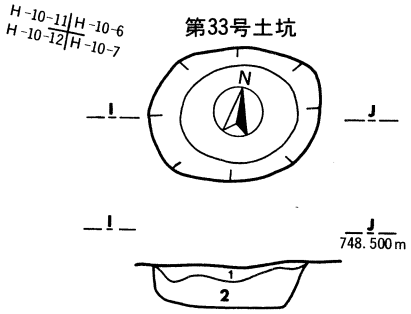
第30号土坑



土　層　説　明

1　褐色土、ローム少量混入
2　褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
3　暗茶褐色土、ローム少量、小礫混入

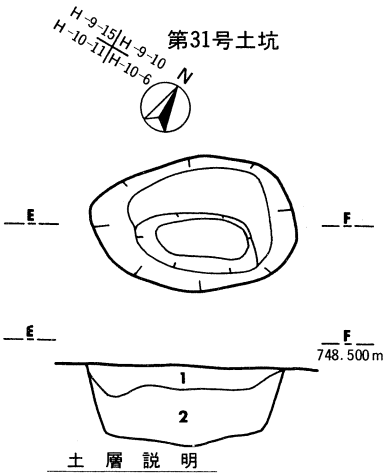
第33号土坑



土　層　説　明

1　褐色土、ローム微量混入
2　茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入

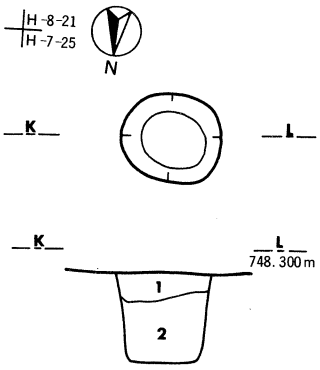
第31号土坑



土　層　説　明

1　褐色土、ローム微量混入
2　暗褐色土、ローム微量、カーボン少量混入

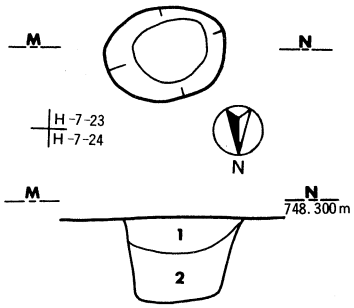
第34号土坑



土　層　説　明

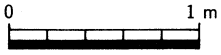
1　暗茶褐色土、ローム多量、カーボン少量混入
2　褐色土、ローム少量、カーボン若干混入

第35号土坑

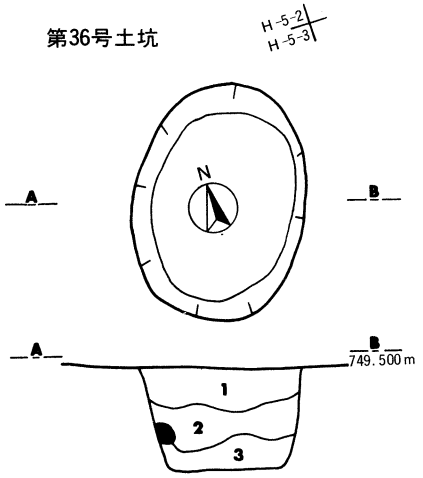


土　層　説　明

1　暗茶褐色土、ローム多量、カーボン少量混入
2　褐色土、ローム少量、カーボン若干混入



第26図　第29・30・31・32・33・34・35号土坑

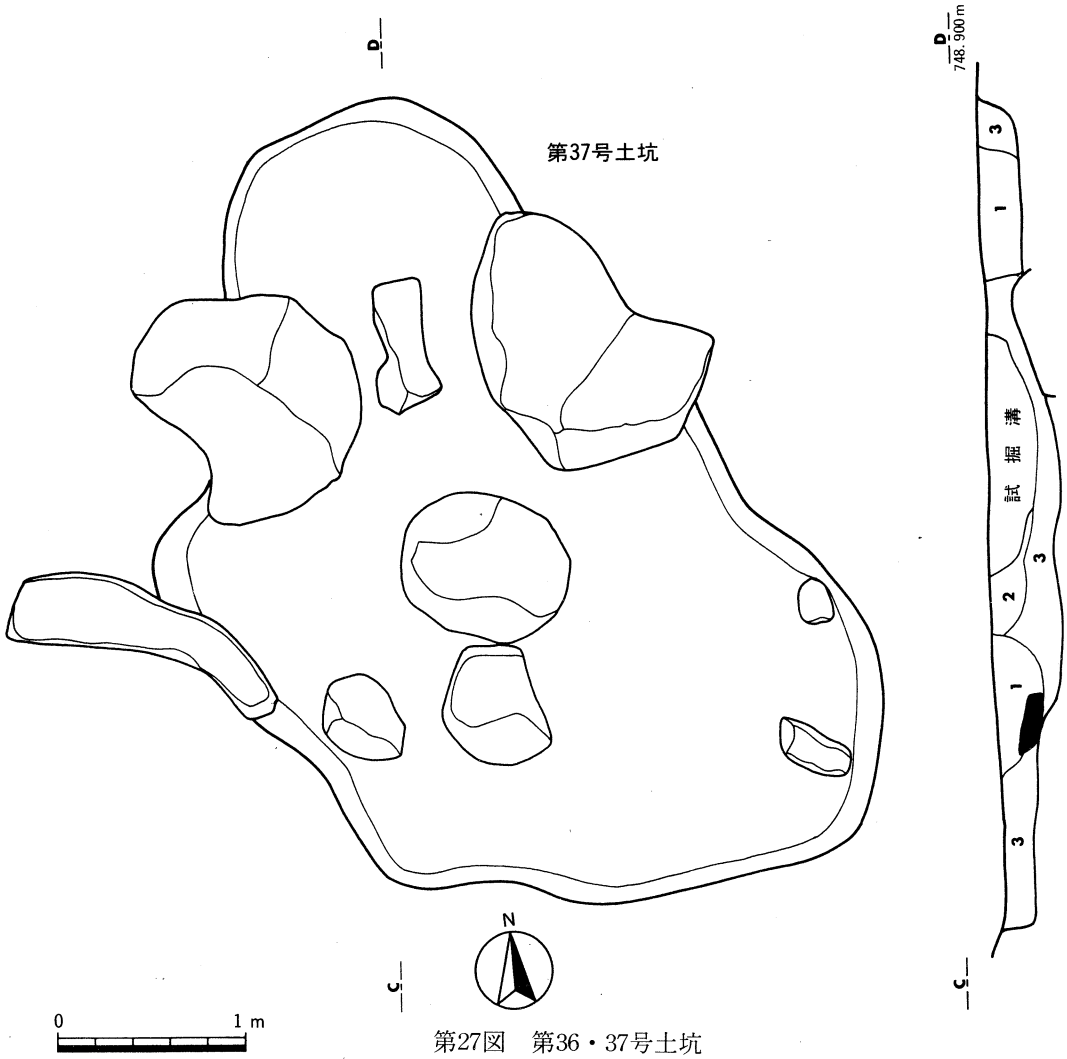


第36号土坑土層説明

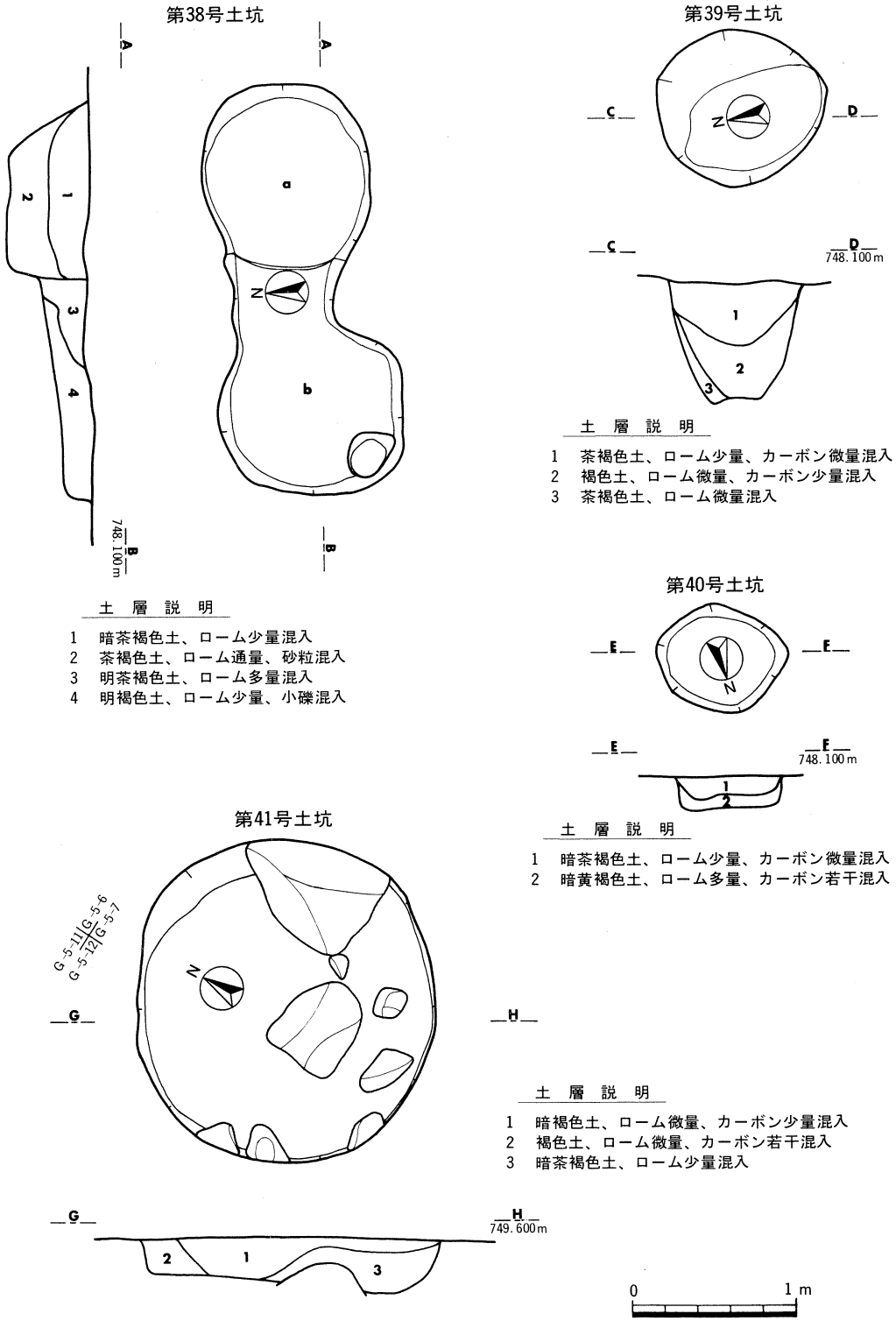
1　茶褐色土、ローム少量混入
2　暗茶褐色土、ローム少量、小礫混入
3　褐色土、ローム微量混入

第37号土坑土層説明

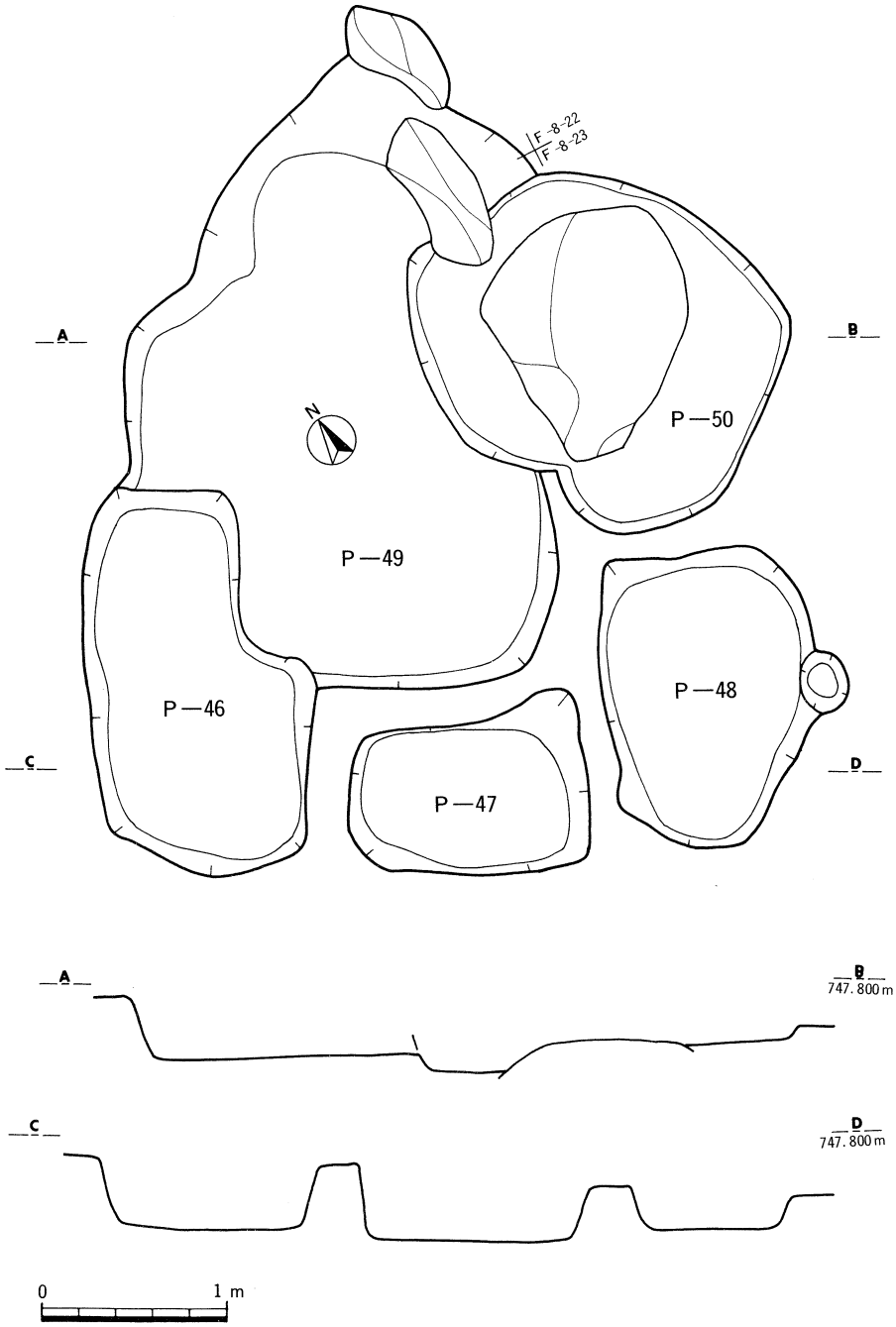
1　暗褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
2　茶褐色土、ローム少量、カーボン少量、焼土若干混入
3　茶褐色土、ローム少量、カーボン少量混入



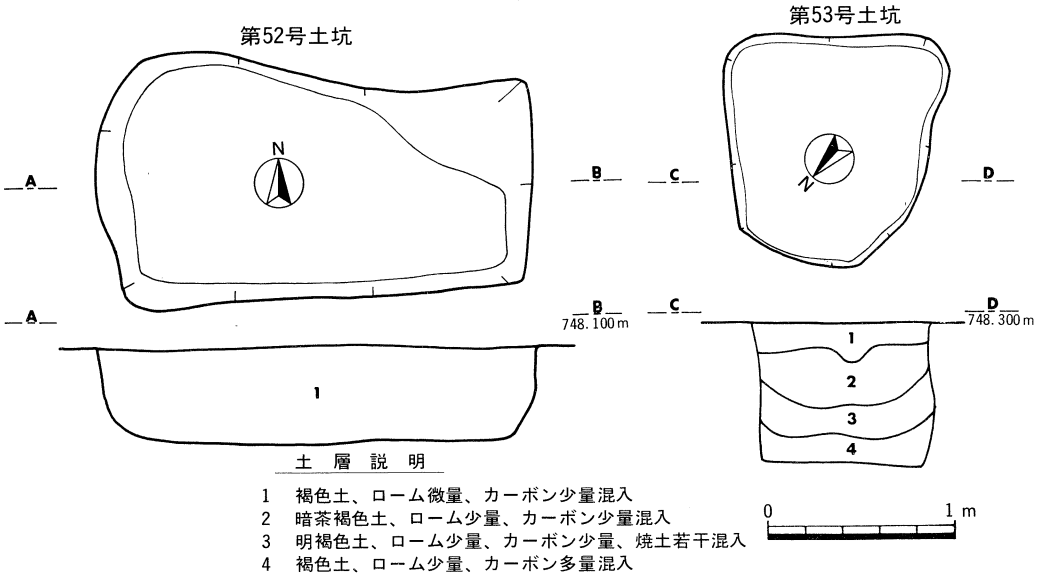
第27図　第36・37号土坑



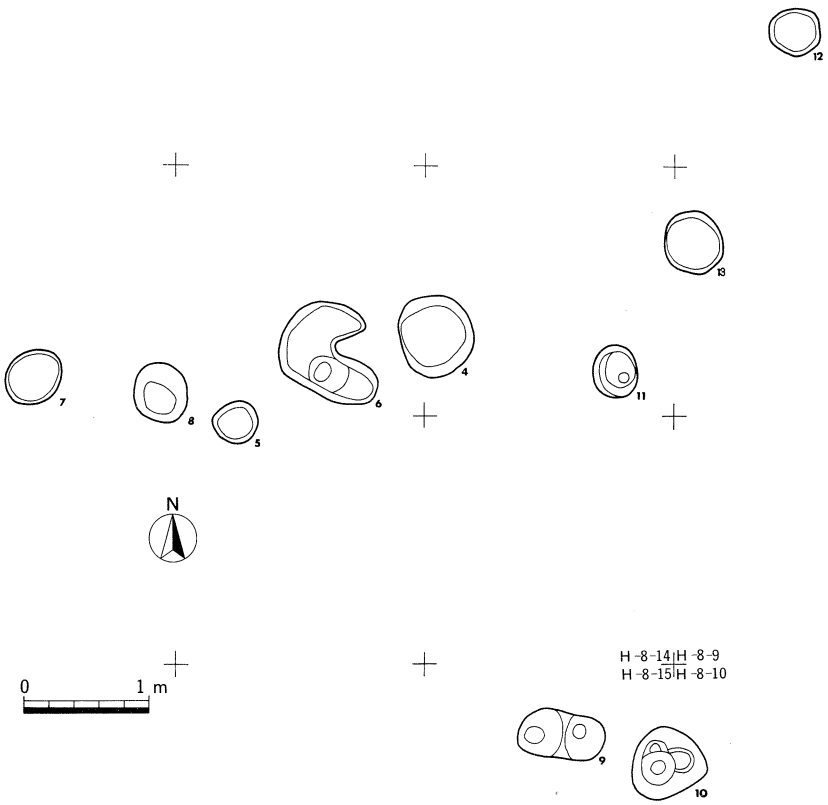
第28図　第38・39・40・41号土坑



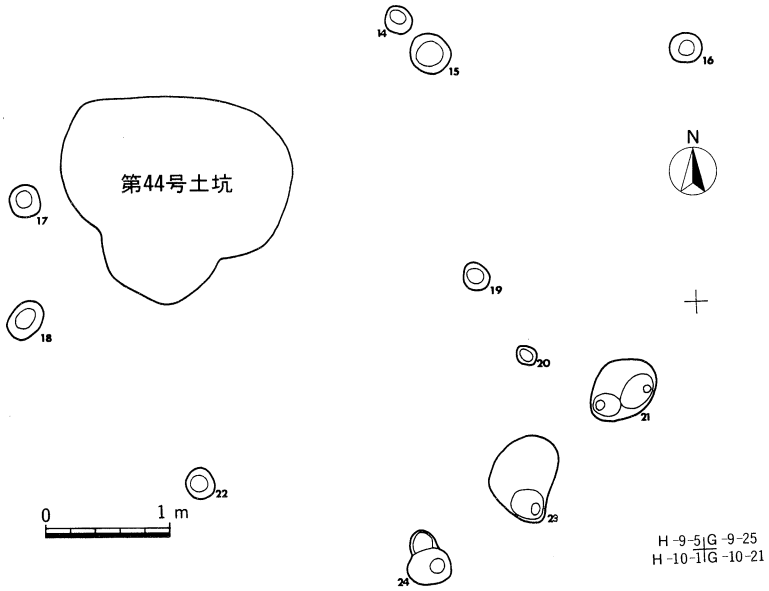
第29図　第46・47・48・49・50号土坑



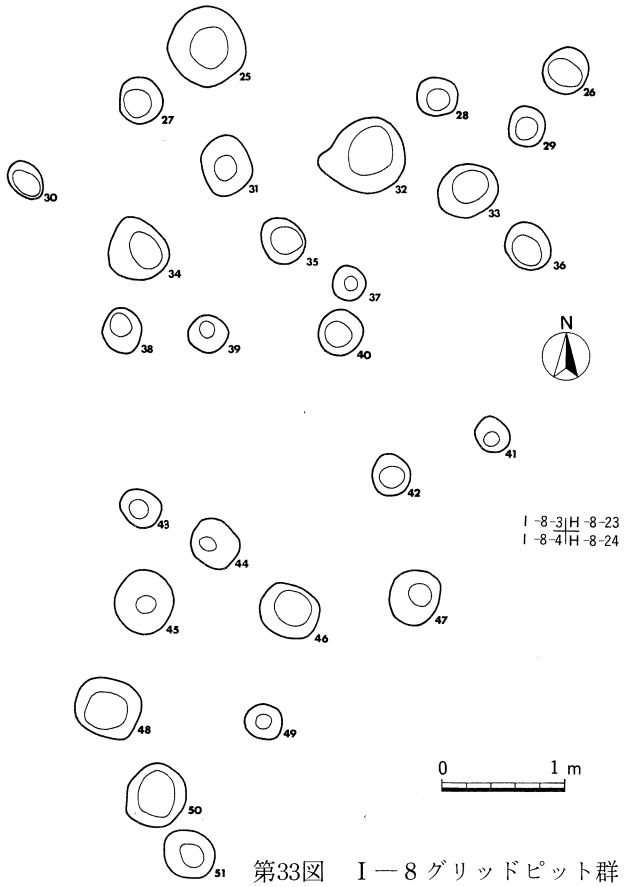
第30図　第52・53号土坑



第31図　H—8グリッドピット群



第32図　H－9グリッドピット群



第33図　I－8グリッドピット群

第Ⅴ章　出土遺物

第１節　土器・陶磁器

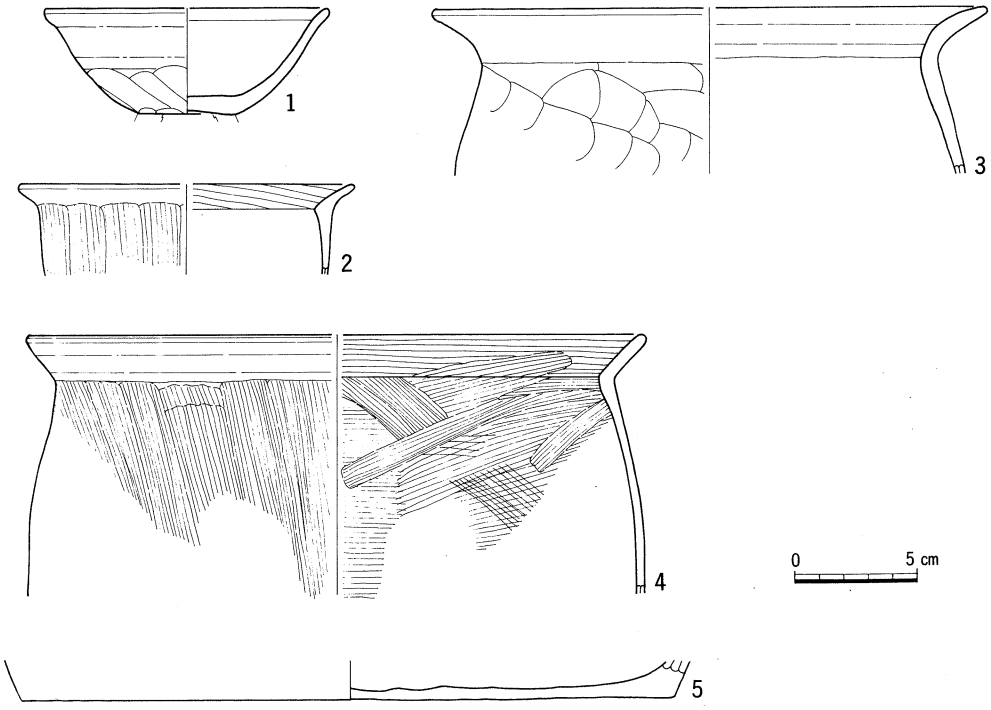
今回出土した土器は、住居址内、土坑内、遺構確認面の三者に大別される。住居址は既述の如く第１・３号住居址が中心であり、土坑では集石遺構がその中心となっている。また、遺構確認面では調査区東側を中心に青磁を含む、ある程度の資料が得られた。

以下、住居址内出土土器より報告する。

１．住居址出土土器

第１号住居址出土土器（第34図）

本址からは土師器坏１、同壺１、同甕２、内耳土器１の計５点が出土しており、**１～４**が本住居址に伴うものである。１は土師器坏で、口径11.4*cm*、底径3.9*cm*、器高4.2*cm*という法量をもつ。体部は横ナデの後、下半を斜め方向に手持ちヘラケズリするもので、内彎気味に緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸い。底部は回転糸切り離し後，外周を手持ちヘラケ



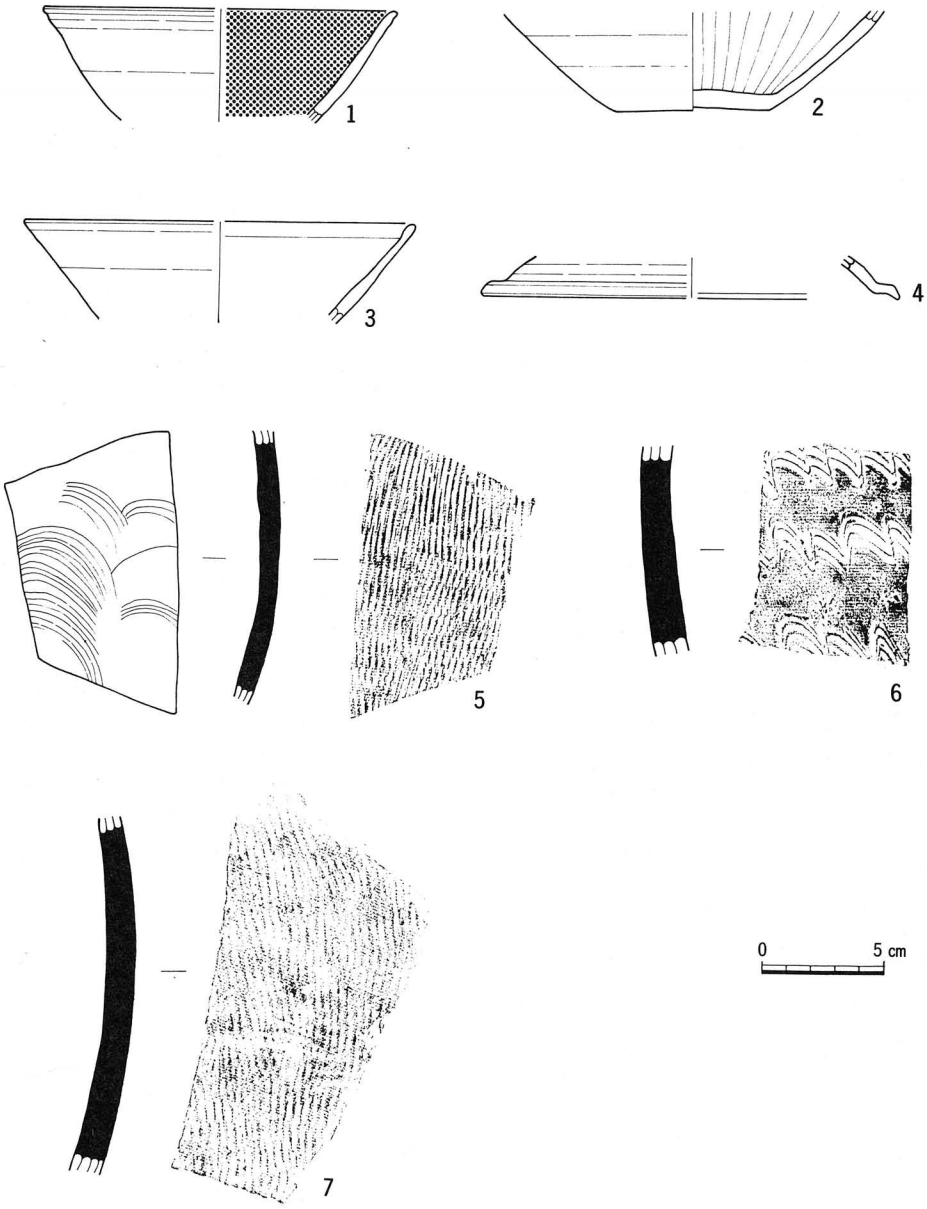
第34図　第１号住居址出土土器

ズリするもので、ほぼ完形である。胎土に赤色粒子を混入し、緻密で比較的良好な胎土である。焼成は良好で堅緻に仕上がっており、色調は暗赤褐色を呈している。2は小型壺で、口縁部から体部へかけて遺存するものである。口径は13.5cmを測る。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に鋭く外反し、端部は丸い。体部外面に縦方向のハケメ調整を、また、口縁部内面に横方向へのハケメ調整を施している。胎土に径1mm大の砂粒及び金雲母を混入し、全体的に粗く、良好な胎土とはいえない。しかしながら焼成は比較的良好で、色調は暗赤褐色を呈している。3・4は土師器甕である。いずれも口縁から体部にかけての遺存である。3は口径22.3cmを測り、丸味をもつ「く」の字状の口縁を呈し、端部は丸い。体部外面を斜め方向にヘラケズリしている。微砂粒を混入するものの胎土・焼成ともに良好で、色調は淡黄色を呈する。4は口径25cmを測り、「く」の字状のはっきりした口縁をもち、端部は丸味を帯びた角状を呈する。体部外面に縦方向へのハケメ調整、体部内面及び口縁部内面に横方向へのハケメ調整をそれぞれ施している。胎土は径1mm以下の小砂粒及び金雲母を含み、粒子は粗いが、焼成は比較的良好で、暗赤褐色を呈している。以上の4点は本住居址に直接伴うものであり、1はカマド前庭部、2～4がカマド内より出土している。5は覆土の最上層より出土した内耳土器である。底部のみの遺存であり、底径27.3cmを測る。胎土は径0.5mm以下の小砂粒を混入するものの、粒子は細かく、焼成も比較的良好である。色調は暗黄褐色を呈している。

以上述べてきた遺物より、本住居址の年代は10世紀第Ⅰ四半期を中心とする年代（註1）が与えられよう。

第3号住居址出土土器（第35図）

本址からは土師器坏3、同蓋1、須恵器甕3の計7点が出土しており、1～3がカマド内よりの出土である。1～3は土師器坏である。1は口縁部の¼の残存であるが、推定口径14.2cmを測る。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸い。胎土は径1mm以下の微砂粒を混入し、焼成は通有、色調は淡黄色を呈する。内面黒色処理される、所謂「内黒土器」である。2は底部から体部にかけて全体の⅓残存するものである。底径6.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。胎土は微砂粒を混入するものの緻密で良好、焼成も良好で堅緻に仕上っており、色調は暗赤褐色を呈する。底部は右方向の全面回転ヘラケズリ調整が施されている。内面には体部において放射状暗文がみられる。3は口縁部の⅙が残存するもので、推定口径15.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかながら内彎気味であり、端部は丸い。胎土・焼成・色調とも2と類似しており、あるいは同一個体であるかもしれない。4は土師器坏蓋で、口縁のみの残存である。推定口径17cmを測る。かえりは消失しており、口縁部は外反気味に開く。胎土は径0.1mm以下の微砂粒及び黒雲母を混入するものの緻密で、焼成も良好、堅緻であり、色調は暗赤褐色を呈する。5～7は須恵器甕である。いずれも破片であり、全容を把握するほどのものではない。6は頸部である。波状文様が施されるものである。



第35図　第３号住居址出土土器

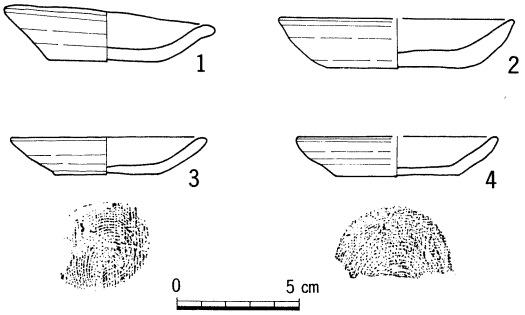
胎土に径0.1㎜大の砂粒を混入し、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。5と7は体部である。5は内外面にタタキ目が、7は外面にタタキ目がみられる。いずれも胎土に径1㎜大の小石を含み、焼成は通有、色調は赤褐色を呈している。

以上の遺物より、本住居址の年代は10世紀前半の、第Ⅰ四半期から第Ⅱ四半期にかけての時期が与えられよう。

2．土坑出土土器

第1号集石出土土器（第36図）

実測可能であったのは土師質土器4点であった。1は口径8.5cm、底径4.6cm、器高2cmを測る。口縁はやや外反し、底部回転糸切り離し後無調整であるが、磨滅が著しく、わずかに痕跡を残すに過ぎない。胎土に微砂粒を混入し、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。2は口径9.5cm、底径5.5cm、器高2cmを測り、やや内彎気味に体部は立ち上がり、肉は厚い。底部は回転糸切り離し後無調整であるが、磨滅が著しい。胎土に径0.5mm以下の小砂粒を混入する。3は口径7.9cm、底径4.1cm、器高1.5cmを測る。底部回転糸切り離し後無調整のものである。胎土には黒雲母を混入する。4は口径8.1cm、底径4.9cm、器高1.6cmを測るもので、やはり底部回転糸切り離し後無調整のものである。体部下半に稜をもつ。胎土に金雲母を混入する。



第36図　第1号集石出土土器

3．遺構確認面出土土器

縄文土器（第37図1～5）

C－3、I－3グリットより数点出土しており、1は新道式期、2・4・5は堀ノ内II式期3は晩期の所産のものである。

灰釉陶器（第37図6）

E－6グリッドより灰釉陶器壺底部片が出土している。高台を有し、高台径15.4cm、高台の高さ1.7cmを測るもので、高台端部は丸い。胎土は緻密で、焼成は良好、堅緻に仕上っている。底部は回転ヘラケズリによる調整を施している。

内耳土器（第37図7）

H－6グリッドより出土したもので、口径28.5cmを測る。胎土は黒色粒子を混入し、粗雑である。外面には2次焼成によると思われるススが付着している。

遺構確認面においてはこの他にも縄文土器、土師器等が出土しているが、いずれも細片であり、実測・図示し得るほどのものではない。

4．陶　磁　器

青磁（第38図１～22）

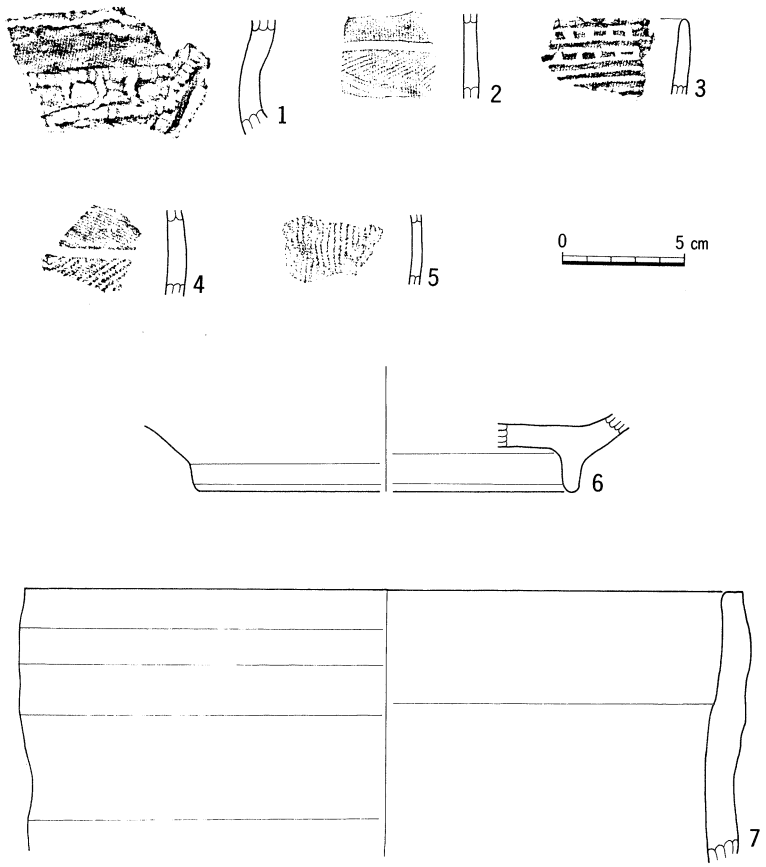
本遺跡より青磁は22点出土している。これらはいずれも破片であるが、その発色より概ね３つに分類される。すなわち、

A：深い緑色を呈するもの

B：淡い明緑色を呈するもの

C：褐色がかった緑色を呈するもの

の３種である。



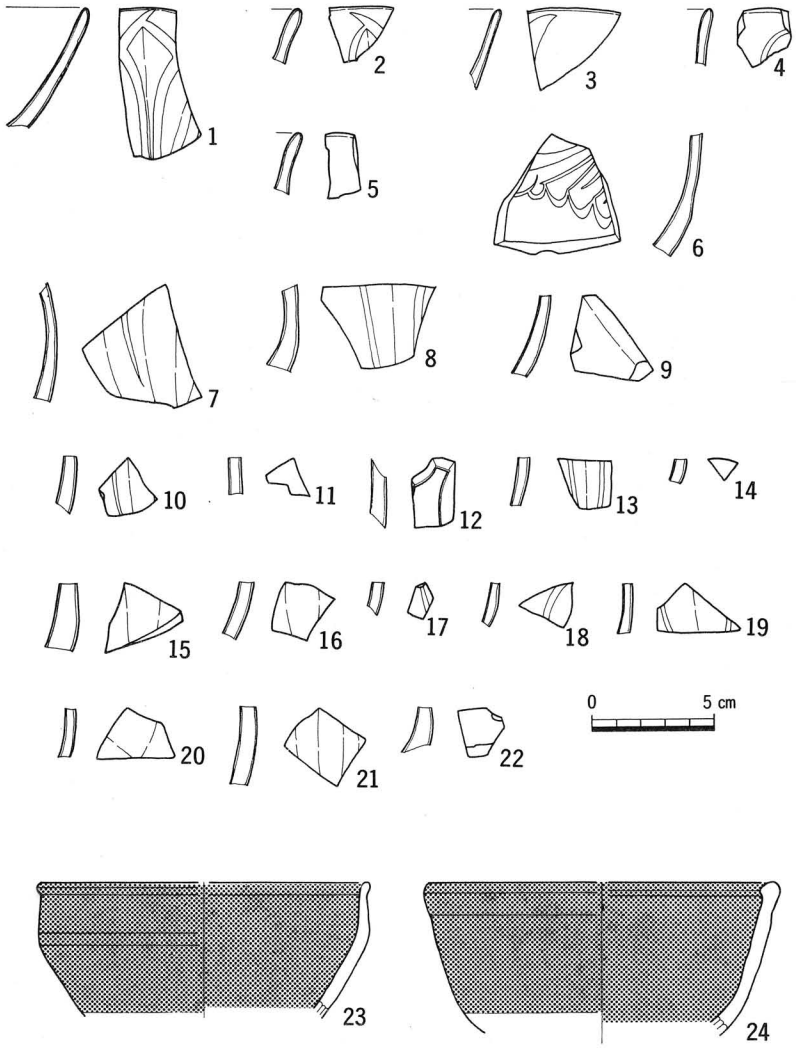
第37図　遺構確認面出土土器

１～14はAのものである。１～５は口縁部で、このうち５を除く４点に片切彫りによる蓮弁文が認められる。６～９は体部下半で、６には片切彫りの蓮弁文（あるいは鳥の翼か？）が内面に施され、また７・８には蓮弁文が外面にみられる。10～14は体部片で、２点に蓮弁文がみられる。いずれも釉は薄く、透明感があるが、９は幾分乳濁している。15～17の３点はBである。すべて体部片で、蓮弁文が認められる。釉は薄く、透明であるが、15は気泡を含んでいる。18～22の５点がCである。いずれも体部であり、18・19には片切彫り蓮弁文がみられる。釉は薄く、透明感がある。１は53号土坑、７は７号住居址、９・12・13・17・18はC－４グリッド、５はG－６グリッド、21はG－10グリッド、他はE－６グリッドより出土している。

青磁に限らず、舶載陶磁器の研究は決して充分とはいえず、問題を残しているが、現在のところ、龍泉窯系の蓮弁文碗が南宋後半に比定されているので、本遺跡出土青磁も13世紀から14世紀の所産と思われ、廃棄された時期はある程度の幅をもたせても14世紀後半に入るものと考えられる。

天目茶碗（第38図23）

G－10グリットより天目茶碗片が出土している。口縁から体部にかけて、全体の１／10程度



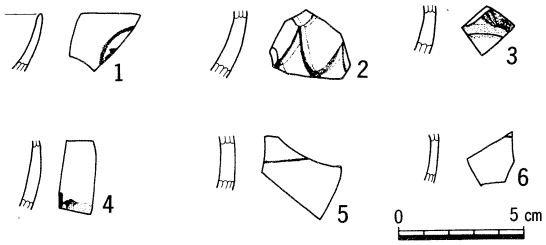
第38図　陶磁器（1）

の遺存であるが、図上復元の限りでは口径13.4*cm*を測る。体部はほぼ直線的に斜めに立ち上がり、上半部においてなめらかに屈曲して、やや内彎気味に直上し、口縁はわずかながら外反して、端部は玉縁状を呈している。胎土は淡黄白色を呈し、非常に軟質なものである。釉は体部より上半に天目釉を施していると思われる。本遺物は美濃製で、16世紀末より17世紀初頭の年代が与えられよう。

鉄釉碗（第38図24）

全体の１／４の遺存で、推定口径14.3*cm*を測る。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁は玉状

を呈する。釉は体部上半に施される。胎土は緻密である。先の天目茶碗同様、美濃製のものであり、その所産も16世紀末より17世紀初頭の年代が与えられる。



第39図　陶磁器（2）

染付（第39図1～6）

1・**4**・**5**・**6**がC—4グリッド、**2**・**3**がB—3グリッドより出土している。いずれも細片である。いずれも初期伊万里と思われ、特に**2**は染付網手文（小壺？）と思われる。したがって17世紀初頭の年代が与えられる。

以上のように、陶磁器は遺物数からみれば比較的豊富で、特に青磁は小片ながら22点と多く注目される。そして、中世から近世、すなわち13世紀から17世紀へかけての遺物がみられることは小和田館跡及び深草館跡の存続期間を考えるうえで注目されるものである。

第2節　石製品・土製品

本遺跡より縄文時代の石鏃6点、石斧2点、用途不明土製品1点、砥石4点、石臼2点、石擂鉢3点、五輪塔3点が出土している。

石鏃（第40図1～6）

いずれも黒曜石製のもので、**1**は4号住居址覆土中より、**2**はD—5グリッド、**3**・**6**はE—6グリッド、**4**は7号住居址覆土中より、**5**はG—8グリッドより、それぞれ出土している。

石斧（第40図7・8）

7は磨製石斧で緑泥片岩製のものである。先端を欠くが、非常にシャープに、丁寧に仕上げられている。**8**は打製石斧である。安山岩製のもので、肉は薄い。前者はC—3グリッド、後者はJ—2グリッドより出土している。

用途不明土製品（第41図）

G—10グリッドより出土している。先端部を欠く。後足があり、体部横に線刻を施してあり、獣を模したものか、あるいは土器把手の一部か不明瞭なところである。現存長4.2*cm*、幅1.5～2.5*cm*を測る。

以上は縄文時代の所産のものであり、以下は中世の所産のものである。

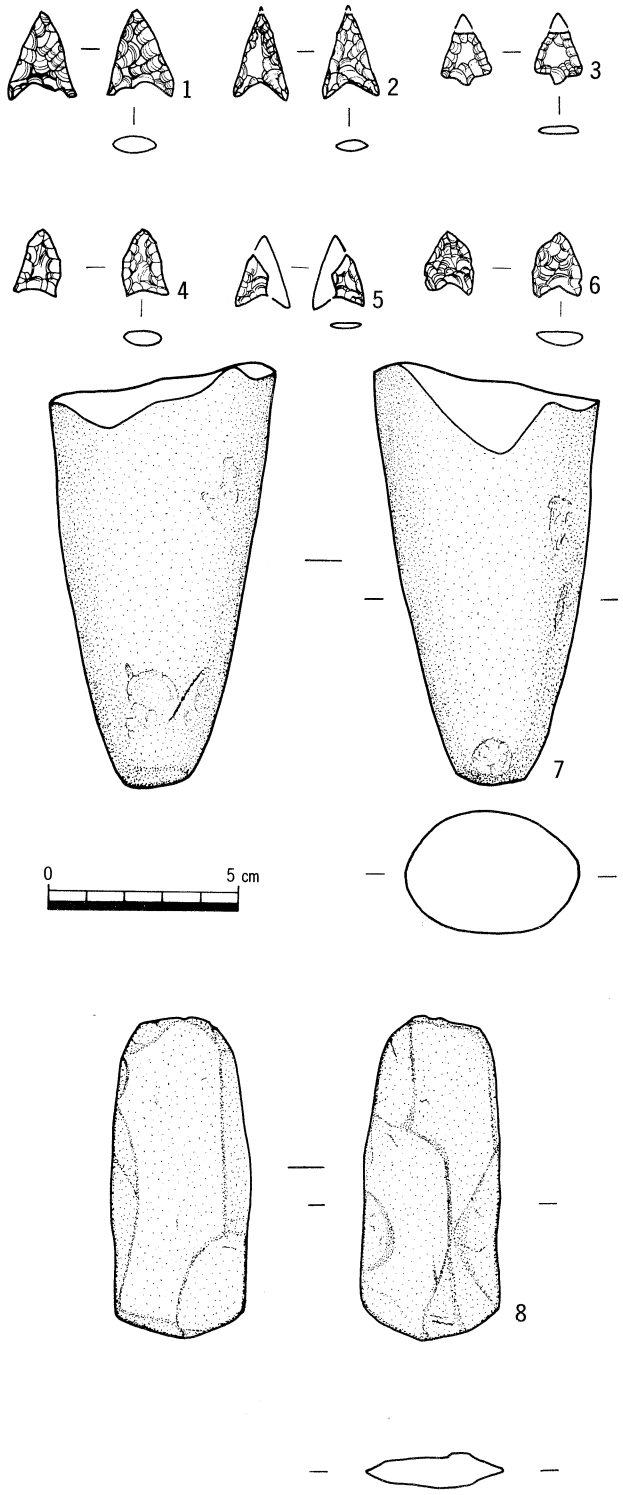
砥石（第42図）

1は35号土坑出土のものである。よく使用され、2面を砥石面として使用する、砂岩系の軟質なものである。**2**はB—3グリット出土のもので両端部を欠損する。2面を砥石面として使用する。側面には10～11条程度の沈線が施されている。硬質の泥岩製である。**3**はE—6グリッド出土のもので身半分を欠く。3面を砥石面として使用する。砂岩系の比較的軟質のものである。**4**は1号集石内より出土したもので、硬質な泥岩製のものである。2面を砥石として使用しており、よく研磨されている。側面に沈線が施される。

1・**2**は手持ち砥石、**3**・**4**は置き砥石と考えられ、集石や土坑内からの出土がみられることは注目される。そして、こうした砥石の存在は金属製品の生産や加工に係るものであり、今後の一層の検討が求められる。

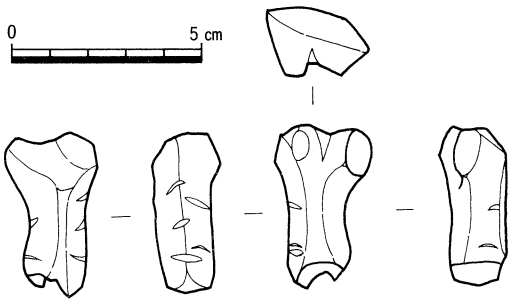
石臼（第43図1・2）

1号集石内より2点出土している。いずれも粉挽き臼の上臼であるが、磨滅が著しく、全体の1／3程の



第40図　石　　器

遺存である。**1**は直径17.4*cm*高さ8.3*cm*、上縁幅11.8*cm*、上縁高1.7*cm*を測るものである。**2**は磨滅著しく、上縁部は明瞭にし得ない。いずれもすり合わせ面は明瞭にし得ない。



第41図　土　製　品

石擂鉢（第43図３～５）

３点出土している。３点とも全体の１／４から１／３にかけての遺存である。**3**はＦ－８グリッドより出土したもので、口径15.9*cm*、底径13.0*cm*、高さ10.2*cm*を測る。**4**・**5**ともに１号集石より出土している。**4**は口径15.9*cm*、底径16.0*cm*、高さ9.5*cm*を測る。**5**は口径18.8*cm*、底径16.1*cm*、高さ10.1*cm*を測る。いずれも磨擦痕は不明瞭である。

五輪塔（第43図６～８）

空・風輪２体、水輪１体がともに１号集石内より出土している。**6**は空・風輪で良好な遺存状態である。全長23.3*cm*、そのうち空輪の長さ15.4*cm*、幅17.6*cm*、風輪の長さ7.9*cm*、幅15.9*cm*を測る。一石より造られており、火輪に接続する柄は付かない。**7**も空・風輪であるが、磨滅が著しく、わずかに空輪の頂部を窺い知るのみで、風輪は輪郭すらわからない。全長17.9*cm*、幅4.8～12.4*cm*を測る。**8**は水輪である。径23.4×22.6*cm*、高さ18.6*cm*を測り、上部に径10～15*cm*、深さ5.5*cm*の穴を穿っている。おそらく納入物を入れたものと考えられる。これらの五輪塔に梵字等の線刻はみられなかった。

第３節　金　属　製　品

本遺跡より出土した金属製品は金箔付銅製碗蓋、古銭14枚、刀子４本、キセル１本、釘等である。

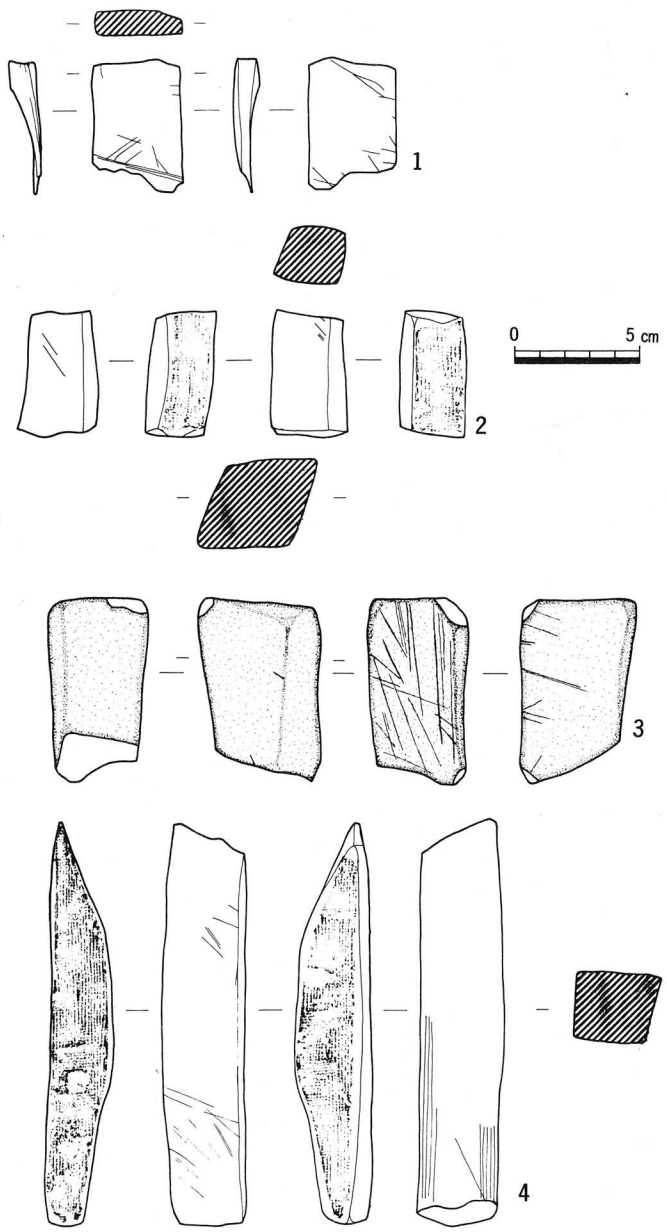
金箔付銅製碗蓋（図版４）

５号住居址床直上より出土しており、出土遺物中最も注目されるものである。本遺物は現在修復・分析中であり、実測図は追って報告することとし、ここでは写真図版をもとに報告する。口径12.5*cm*、器高5.0*cm*、つまみ径5.0*cm*、つまみ高0.5*cm*を測り、器肉は0.1～0.2*cm*で非常に薄く、打ち出しによる成形である。体部及びつまみ部に打ち出しによる草木文様が施されており、外面全体に金箔を貼付するものである。こうした遺物の類例は全国的にみてもなく、年代

的にみても非常に注目されるものである。5号住居址からは後述するように「聖宋元宝」が覆土中より出土しており、ある程度の幅をもたせても12～14世紀代の年代が想定でき、分析結果を待って改めて論じたいと思う。

古銭（第44図）

本遺跡より14枚の古銭が出土しており、**13**を除いてすべて渡来銭である。**1～7**は遺構出土のもので、**1**は5号住、**2**は7号住、**3**は1号溝、**4・5**は37号土坑、**6**は43号土坑、**7**は46号土坑より出土している。**8～13**は遺構確認面よりの出土である。**5・12**は腐食著しく、銭貨名を明確にし得ないが、それ以外のものは良好であり、聖宋元宝、嘉祐元宝、天聖元宝、熙寧元宝、元祐通宝、元符通宝、祥符元宝、景祐元宝の8種類の北宋銭と寛永通宝である。



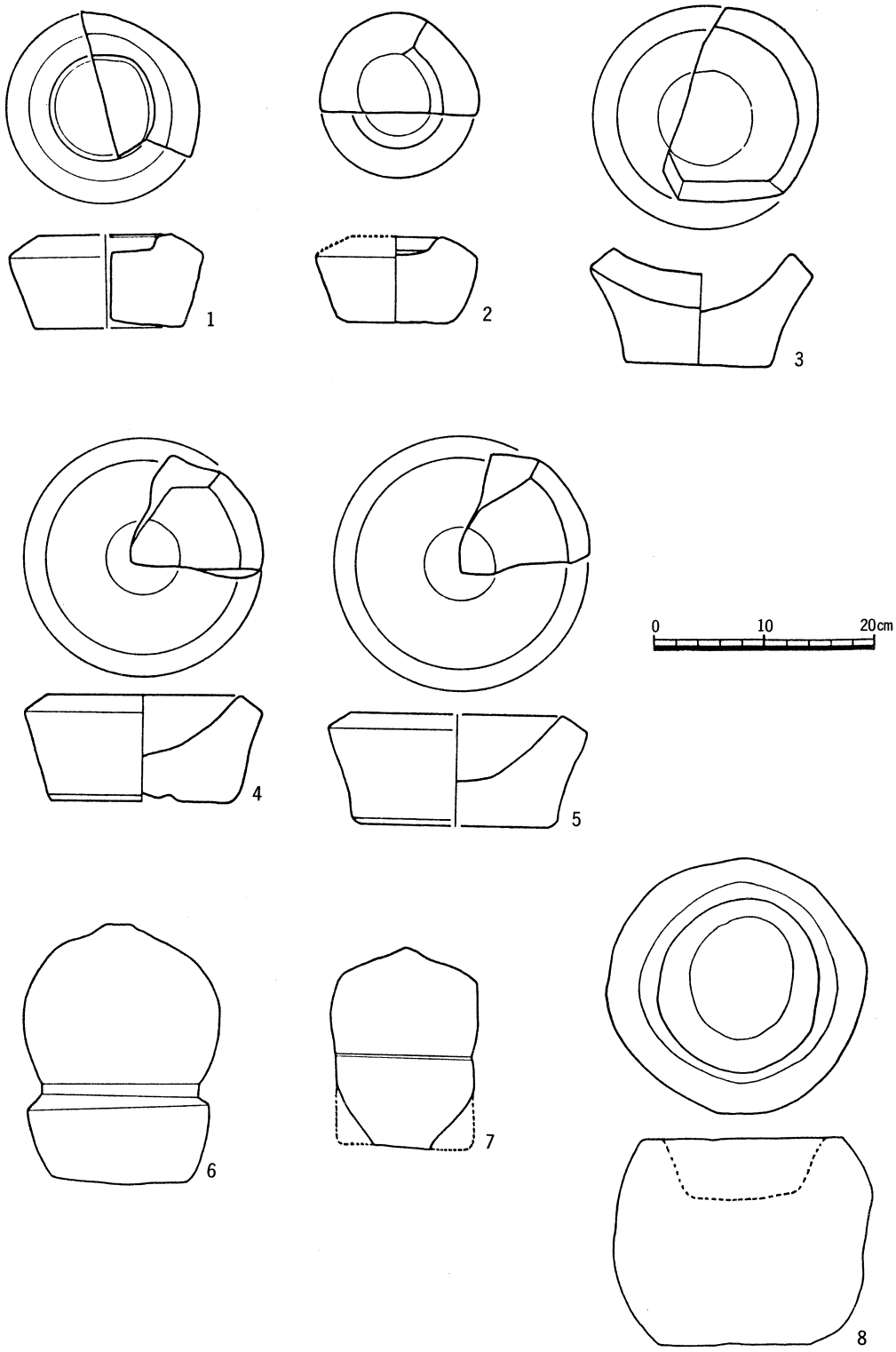
第42図　砥　　石

刀子（第45図1～4）

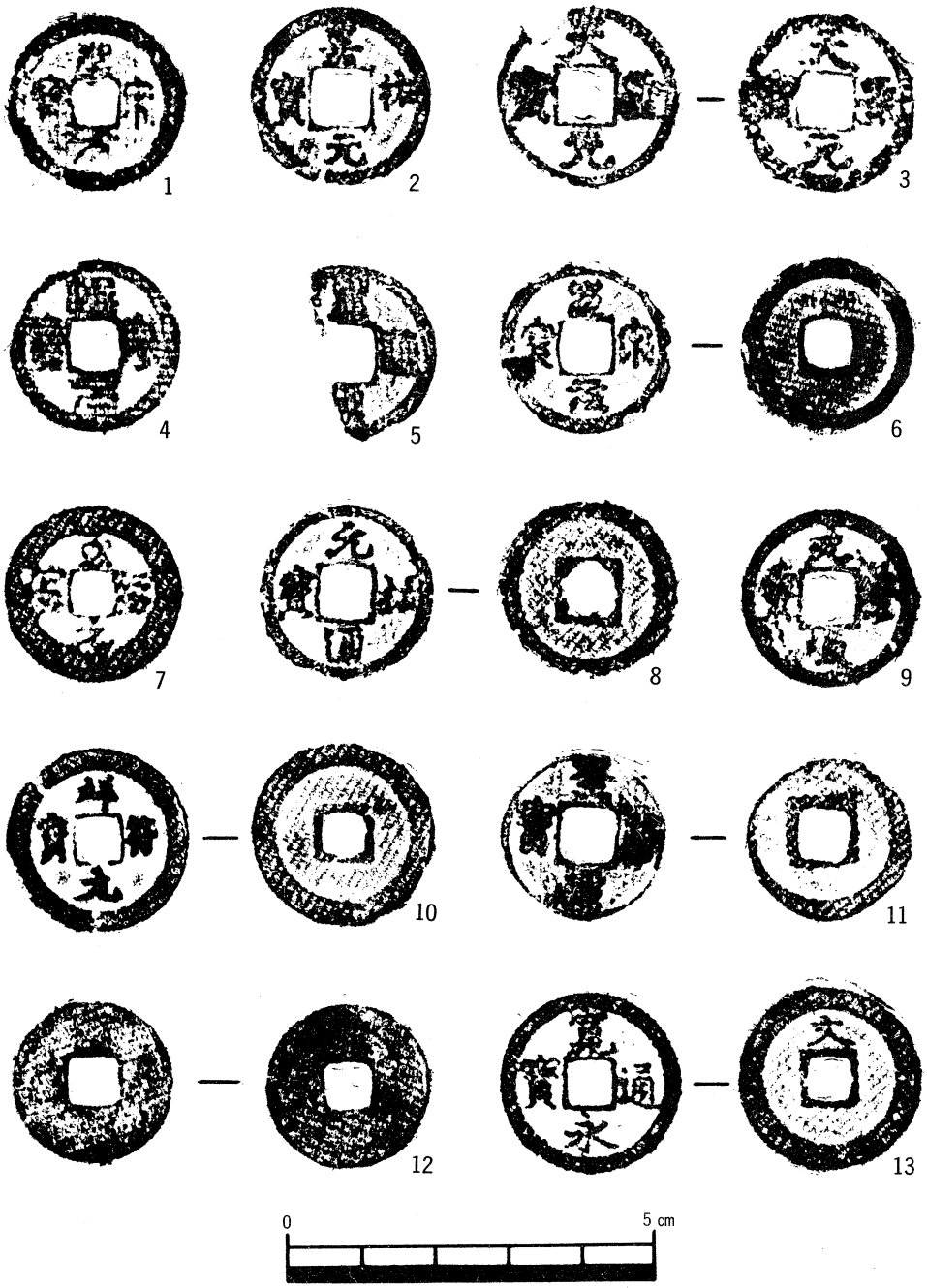
1のみほぼ完存であるが、全て腐食が著しい。**2**は8号住居址覆土中よりの出土で、他は確認面出土である。

その他（第45図5～7）

5はキセルで火皿と雁首部の遺存である。遺存状態は比較的良好であるが、雁首の身半分は



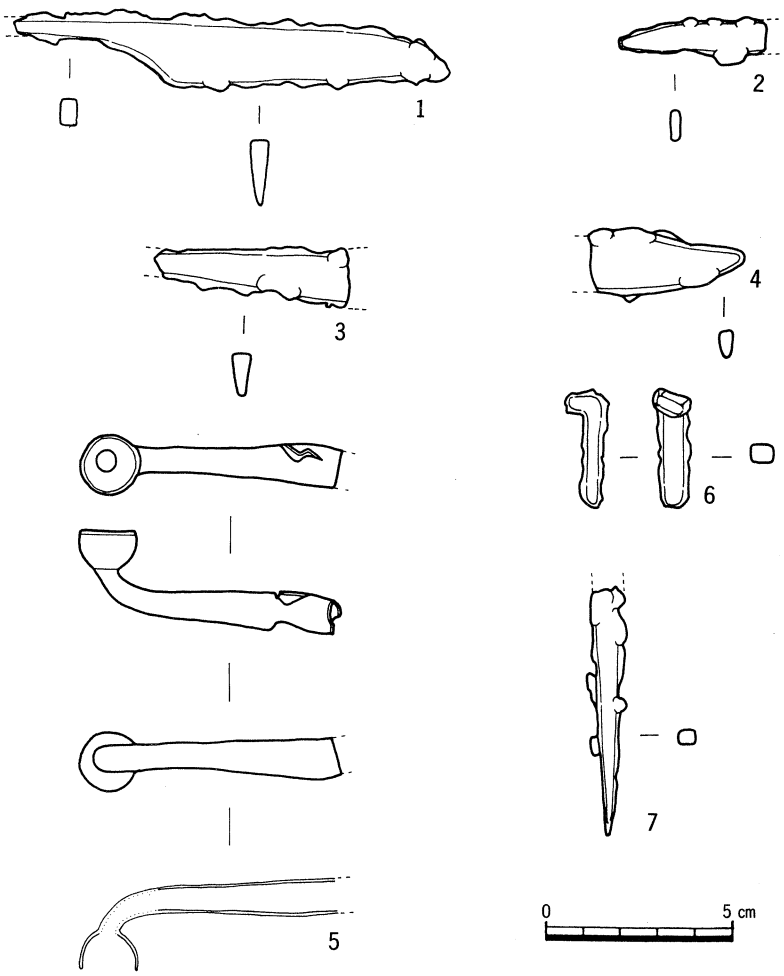
第43図　石擂鉢及び五輪塔



第44図　古　　銭

欠損している。内部に繊維状の炭化物がある。6は先端を欠き、身の短い釘である。7は用途不明鉄製品で角棒状を呈する。鉄鏃の篦代部の可能性もある。

本遺跡出土の金属製品はその出土状況よりみて、中世の所産であると考えられる。その中でも特に金箔付銅製碗蓋は本遺跡の性格を考える上でも貴重な資料であるといえる。

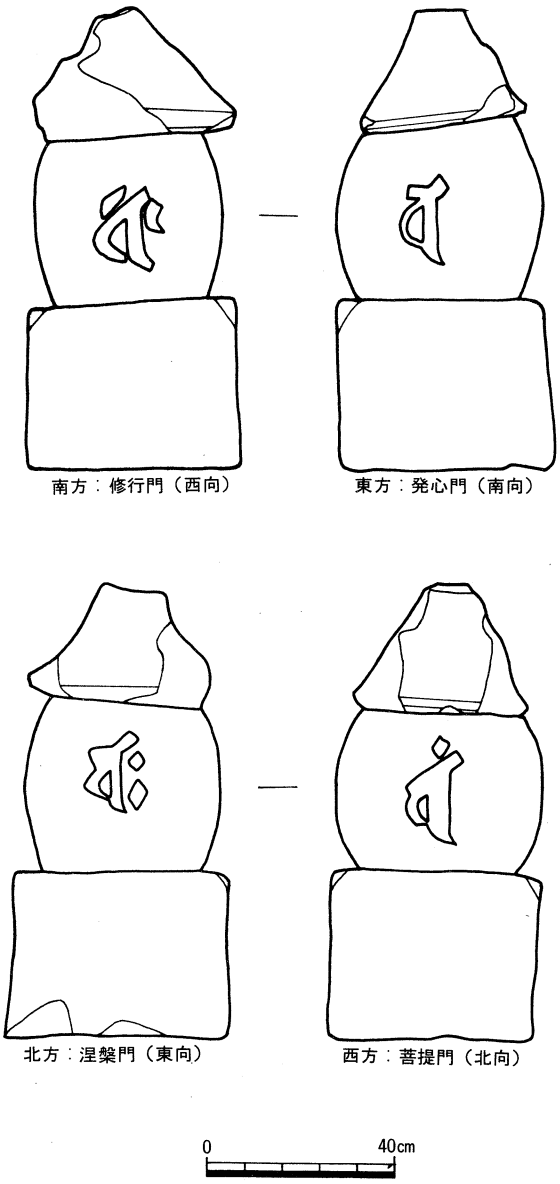


第45図　遺構及び確認面出土金属製品

第4節　そ　の　他

調査区外五輪塔（第46図）

これは調査区外、大八田2562に位置する五輪塔である。空・風輪を欠くものの、火輪・水輪・地輪が現存する。火輪は損償が著しい。水輪には四面にそれぞれ「バ」「バー」「バン」「バク」の梵字が刻まれているが、火輪及び地輪には認められない。この五輪塔はその形態より鎌倉時代のものと考えられ、本遺跡及び深草館跡との関連が想定され得るものである。また、この五輪塔と並んで道祖神も鎮座しているが、これはさらに時代が降るものである。



第46図　調査区外五輪塔

註1　甲斐国における歴史時代土器編年は『神奈川考古14号』で発表されたものが、現在一応完成したものとされており、本書はこれにならった。

なお、本章を執筆するにあたり、県埋文センター田代孝氏、および小林真氏より有益な御助言を賜った。

第Ⅵ章　考　　察

本年度における調査は以上のように昨年度調査区E区の延長上であり、連続して考えるべきであり、事実圃場整備事業に係る書類上は「小和田館跡」としている。しかしながら、本遺跡の位置からみても小和田館跡というよりはむしろ深草館跡の範疇として捉えられること、館跡の外側に隣接することなどから、本書ではこれを分離し、「小和田北遺跡」として統一してある。そこで、E区をふまえた上で若干の考察を行なって結びとしたい。

縄文時代

本遺跡より縄文時代と認識される遺構は検出されておらず、また出土した遺物も確認面よりの出土である。それは中期中葉より晩期にかけてのものであり、中期中葉の新道式のものは小和田においても5基が検出されている。また、後・晩期の著名な遺跡である金生遺跡が北約500*m*に、後期の集落址である別当遺跡が北西約800*m*に位置するなど、周辺に該期の遺跡が多く、来年度以降の調査区において当該期の集落の検出が予想されるものである。

平安時代

この時期の住居址は3軒検出されているが、E区においては6軒検出されている。何れも9世紀後半から10世紀にかけての所産である。住居址構造をみれば、4号住を除いてすべて東カマドを有しており、4号住のみ北カマドを有している。本遺跡の南約2*km*に位置する柳坪遺跡群（註1）では現在までに70軒の平安時代住居址が検出されており、すべてが東カマドを有している。カマドの構築には当然風位を考慮するものであり、この長坂の地は、所謂「八ヶ岳おろし」と呼ばれる北、もしくは北西の風の吹く所であり、東カマドが最も妥当である。4号住は遺物がほとんどなく、時期決定が不安定であるが、住居構築に際して他の住居址との間に若干の時間差が認められるかもしれない。また、本遺跡の面積に比べると住居址の数は非常に少なく、集落と集落との狭間に位置しているものと思われる。こうしてみると柳坪―小和田―金生―城下―寺所と平安時代の集落址が多く、当時この付近が一大村落であったことがわかる。事実この地は古くから荘園として知られている（註2）が、注目すべきことは9世紀前半以前の、特に8世紀代の資料がほとんどみられないことがある（鬼高期までの資料はある程度得られている)。また、個々の集落をみると掘立柱建物址を伴っているなど、ある程度の規制が窺える。こうした点について萩原三雄氏はこれを公的権力と結び付いた開墾集落として捉えており、非常に注目すべき見解である（註3)。しかし、鬼高期まで生活していた人々が姿を消し、9世紀に入って再び入植したとは考えられず、少数ではあろうが8世紀代においても人々は生活しており、やがてより大規模な開発が行なわれたと考えられるのではないだろうか。

中　世

本遺跡において最も成果のある時期である。小和田館跡で顕著にみられた9本柱を持つ竪穴

遺構は本遺跡においても第5号住居址1基が検出されている。しかし、両者の間にはいくつかの差違が認められる。一つはカーボンの有無である。あれほど確認されたカーボンの堆積は本址においては全くみられない。二つめに壁際における内部へ張り出す掘り残し部分のないことが挙げられる。こうした差は何に起因するものであろうか。小和田館跡におけるこうした竪穴遺構は概ね15世紀という年代が与えられているが、本址のそれは13～14世紀という年代を想定している。単に時間差といってしまえばそれだけであるが、他の素因も考えられないだろうか。遺構の機能を考えてみると、これを住居として捉えるか、倉として捉えるかという問題がまずある。本址においては、カーボンの堆積のみられないこと、遺構内に巨石の入り込んでいること等からみて、後者としての性格が強いものと考える。住居として考えた場合、住居の中央に柱があったのでは空間的に窮屈であったろうし、置きカマドにしても住居の中央を占有していたのでは不都合であったろう。また、本址が深草館の範疇であることも考慮すべき点であろう。

次に五輪塔を出土した集石について述べてみたい。この集石についてはその出土遺物より13～14世紀の年代が想定される。当時において五輪塔はといえば、支配者層によって造立された一種のスティタス・シンボルであった。そうしたものが部分的であるにせよ一つの遺構より出土したことは注目される。さらに当時の高級品ともいえる石臼や石擂鉢が併せて出土していることも注目される事象である。これらが一括廃棄されたものか、意図的に遺棄されたものであるかは、出土状況からはどちらともいえるが、仮に前者とした場合、小礫と共に廃棄する理由を見出すことができない。従って、こうした石製品を意識的に遺棄した、精神活動の場としての性格を想定したい。

最後に、深草館跡の外郭部より青磁が出土している。これらは廃棄したものと考えられるが量的にみれば破片とはいえ、12～14世紀の資料としては豊富であり、金生遺跡B区の資料と併せて深草館跡の性格を考える上で非常に重要なものであり、非常に注目される。そして、深草館跡のもつ意味は長坂町の歴史のみならず、中世日本史を解明する上で、このうえもない位置を占るものであることが示唆されたといえよう。そのため今後の調査・研究が注目されるものであり、無責任な調査に終ることのないよう努めなくてはならない。

註1　米田明訓氏の御教示による

註2　「逸見荘」「大八幡荘」等があるが、大八幡荘については小淵沢町北野天神社の応永9年9月25日の鰐口銘に「甲州大八幡庄山宮天神」とあるのが文献として唯一のものである。そのためにその存在が疑問視されており、秋山敬氏は現在の大八田が逸見荘に含まれることなどから、これを「大八田郷」という意味が強いという見解を示している。

註3　北巨摩郡下における平安時代の集落は9世紀後半代に著しく増大し、11世紀代で終焉しており、掘立柱建物址や鍛治工房を伴うを特徴とする。こうした事象に対しての萩原氏の見解は卓越したものといえる。

参　考　文　献

磯貝正義　『郡司及び采女制度の研究』　吉川弘文館　1978

上田秀夫　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会　1982

服部実喜　「関東地方出土の輸入陶磁器について」『神奈川考古』20号
神奈川考古同人会　1985

神奈川考古同人会『シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題―相模国と
周辺地域の様相』　1983

『浜町屋敷内遺跡C地点』　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985

『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　北巨摩郡長坂・明野・韮
崎地内』　山梨県教育委員会　1975

『小和田館跡発掘調査概報』　長坂町教育委員会　1984・1985

第1表　土　坑　集　成　表

Nr.		グリッド	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	備　考
1		Q－5	楕円形	220×154	14		
2	a	Q－5	円　形	87×72	12		b、cに先行
	b	Q－5	円　形	150×120	22		
	c	Q－5	円　形	136×105	17		
3		Q－5	円　形	130×100	26		
4		Q－3	円　形	170×150	52	内耳土器片、陶器片	集石土坑
6		R－7	長方形	170×120	72	陶器片	
7		R－7	円　形	90×90	56		
8		Q－6	不整円形	205×100	16		2基？
9		Q－6	円　形	135×116	17		
10		Q－7	円　形	125×100	19		
11		Q－7	楕円形	130×74	25		
12		Q－7	楕円形	175×86	14		
13		L－8	正方形	257×236	91	土師器片、須恵器片、陶器片	地下式土壙
14		I－4	楕円形	187×76	17		
15		J－6	楕円形	92×43	30		2基？
16		K－6	円　形	86×70	48		
17		K－6	円　形	110×90	42		
18		K－6	楕円形	76×55	42		
19		I－5 J－5	円　形	174×167	28		
20		L－7	円　形	122×97	20		
21		K－7	楕円形	242×100	26		
23		H－9	円　形	119×114	28		
24		H－9	円　形	110×96	24		
25		H－9	円　形	107×102	47		
26		H－9	円　形	110×104	30		
27		H－9	円　形	120×108	25		
28		H－10	不整円形	294×253	35		集石土坑
29		H－8	方　形	110×80	19		
30	a	H－8	方　形	185×150	46	土師器坏底部片	
	b	H－8	方　形	95×30	35		

Nr.	グリッド	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	備　考
31	H－10	円　形	110×71	48		
32	G－9	楕円形	119×66	45		
33	H－10	円　形	92×70	26		
34	H－7	円　形	64×49	46	陶器片、釘	
35	H－7	楕円形	52×47	50	砥石	
36	H－5	円　形	16×91	52		
37	G－6 H－6	不整形	476×315	37	青磁片、古銭2、陶器片	複数？
38 a	H－8	円　形	112×102	50	土器片	
38 b	H－8	円　形	136×110	29		aに先行
39	H－8	円　形	101×88	65		
40	H－8	円　形	81×60	20		
41	G－5	円　形	190×180	30	土器片	
43	G－5	楕円形	326×240	42	古銭1、馬歯	集石土坑
44	H－9	方　形	186×110	80		地下式土壙
46	G－8	方　形	205×83	40		
47	G－8	方　形	117×80	29		
48	G－8	方　形	159×88	32		
49	G－8	楕円形	308×150	32		
50	G－8	不整円形	262×193	20		
51	G－9	円　形	103×90	30		集石土坑
52	H－8	方　形	231×110	55		
53	H－7	方　形	120×107	75		

註：第5・22・42・45号土坑は欠番。

第2表　ピ　ッ　ト　集　成　表

G—5グリッド

Nr.	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
1	楕円形	62×40	40		S	
2	楕円形	40×28	18.1		S	
3	楕円形	45×27	11		S	

H—8グリッド

Nr.	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
4	円　形	67×59	19		C	
5	円　形	39×34	9.6		D	
6	円　形	50×45	9.6		C	
7	楕円形	94×40	22.9		D	
8	円　形	50×40	43.4		D	
9	楕円形	70×36	41		A	
10	円　形	60×50	50.5		A	
11	円　形	40×35	32		C	
12	円　形	41×39	23.3		A	
13	円　形	51×57	59		A	

H—9グリッド

Nr.	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
14	楕円形	47×23	29		A	
15	円　形	30×25	9.2		A	
16	楕円形	34×26	16.4		A	
17	円　形	25×22	11.2		A	
18	円　形	25×22	24.3		A	
19	円　形	35×33	12.5		A	
20	円　形	24×22	22.7		A	
21	不整円形	64×52	14.3		A	
22	楕円形	17×13	20.8		A	

Nr.	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
23	楕円形	60×43	2 8		A	
24	円　形	25×22	10.7		A	

I—8グリッド

Nr.	形　状	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
25	円　形	64×60	18.3		B	
26	円　形	39×37	36.3		A	
27	円　形	38×36	50.5		B	
28	円　形	35×33	18.9		B	
29	円　形	35×30	7.9		B	
30	円　形	37×25	23.5		B	
31	円　形	54×40	21.6		B	
32	楕円形	70×57	36.3		B	
33	円　形	49×40	28.1		B	
34	円　形	50×45	69.2		A	
35	円　形	37×35	28.8		A	
36	円　形	51×34	21.3	陶器片	B	
37	円　形	30×27	10.7		A	
38	円　形	37×31	55.5		B	
39	円　形	33×31	19.5		A	
40	円　形	38×37	28.5		A	
41	円　形	30×25	17.7		A	
42	円　形	32×31	20.5		A	
43	円　形	33×28	1 7		A	
44	円　形	42×37	43.5		A	
45	円　形	52×48	58.8	陶器片	A	
46	円　形	51×42	26.1		A	
47	円　形	45×40	25.9		A	
48	円　形	55×46	34.9		B	
49	円　形	31×28	19.4		A	
50	円　形	55×53	37.1		A	

Nr.	グリッド	規模(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	覆　土	備　考
51	円　形	44×40	20	黒曜石剝片	A	

註：本表内における覆土の記号の意味は以下に示す通りである。

A　褐色土、ローム少量、焼土極微量、カーボン微量混入。
B　上層：明褐色土、ローム少量混入。　下層：黄褐色土、小礫を含む。
C　灰褐色土、ローム少量、小礫混入。
D　暗茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入。

S　セクション図あり。

第3表　金　属　器　集　成　表

刀　子

Nr.	全長 (cm)	身			茎			備　考	出土地点
		長さ (cm)	幅 (cm)	重ね (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	重ね (cm)		
1	11.6	9.1	0.8～1.7	0.2～0.5	2.5	0.5～0.7	0.4	茎の先端を欠損する	I－7Gr
2	3.9	—	—	—	3.9	0.3～1.0	0.2	茎から身にかけて欠損	8　号　住
3	5.2	(5.2)	0.8～1.6	0.3～0.5	—	—	—	身先端、茎欠損	C－4Gr
4	4.1	(4.1)	0.3～1.7	0.2～0.4	—	—	—	身中位以下欠損	E－6Gr

そ　の　他

Nr.	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備　考	出土地点
5	6.9	0.6～1.0	0.1	キセル。火皿部の径1.6cm、高さ1.0cm、厚さ0.1cm、碗状を呈する。内部には炭化物が付着している。銅製。	H—7—2Gr
6	3.1	0.4～0.6	0.5～0.6	釘。頭部0.8×0.9cmの長方形を呈す。	E－6Gr
7	6.4	0.2～1.0	0.2～0.3	用途不明鉄製品。断面方形で棒状を呈する。鏃の篦代部か？	54 号 土 坑

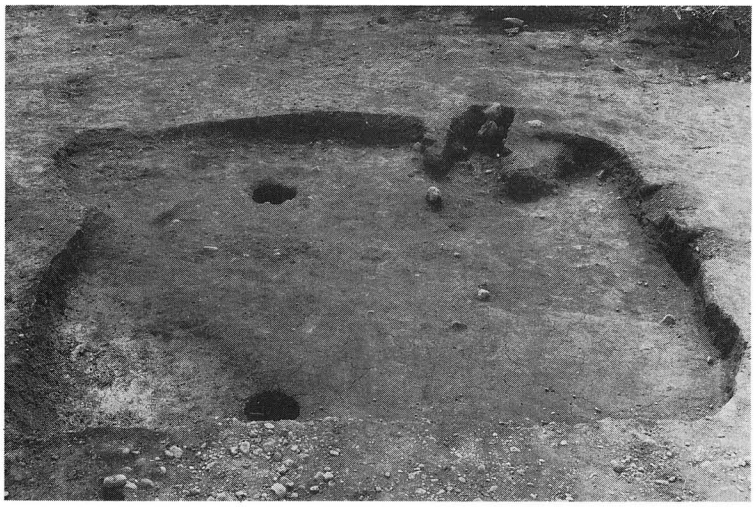
古　銭

Nr.	銭貨名	出土地点	径 (cm)	重 (g)	初　鋳　年	書体	国	備　考
1	聖宋元宝	5　号　住	2.4	1.4	建中靖国元年(1101)	篆	北宋	
2	嘉祐元宝	7　号　住	2.4	1.3	嘉祐年間(1056-63)	楷	北宋	
3	天聖元宝	1　号　溝	2.4	2.8	天聖元年(1068)	楷	北宋	2枚張り付いている
4	熙寧元宝	37　号　土　坑	2.3	1.3	熙寧元年(1068)	楷	北宋	
5		37　号　土　坑	2.4	0.7				½を欠く
6	聖宋元宝	43　号　土　坑	2.3	1.4	建中靖国元年(1101)	篆	北宋	
7	至道元宝	46　号　土　坑	2.3	2.1	至道元年(995)	行	北宋	
8	元祐通宝	G－8グリッド	2.3	1.8	元祐元年(1086)	行	北宋	
9	元符通宝	K－6グリッド	2.4	1.8	元符元年(1098)	行	北宋	
10	祥符元宝	L－8グリッド	2.4	1.1	大中祥符元年(1008)	楷	北宋	
11	景祐元宝	Q－6グリッド	2.2	1.0	景祐元年(1034)	楷	北宋	
12		Q－7グリッド	2.2	1.2				
13	寛永通宝	E－6グリッド	2.4	1.5	寛文8年(1668)	楷	日本	背に「文」

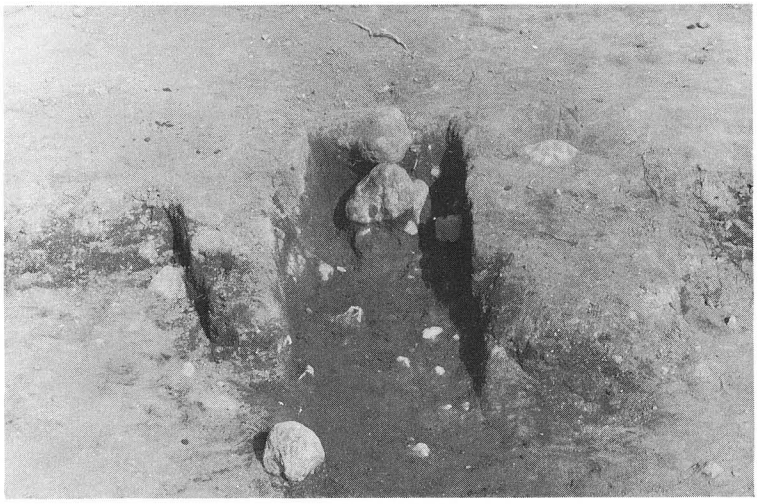
１．遺跡全景（西から）

２．遺跡全景（北から）

３．第１号住居址

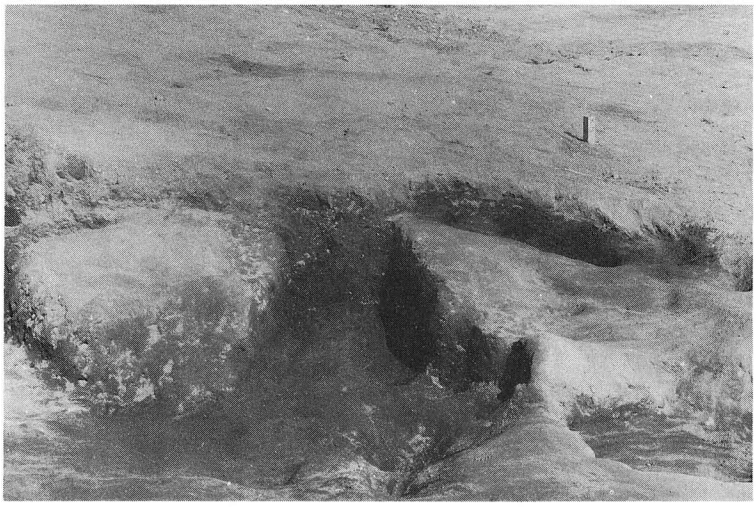


第２図版



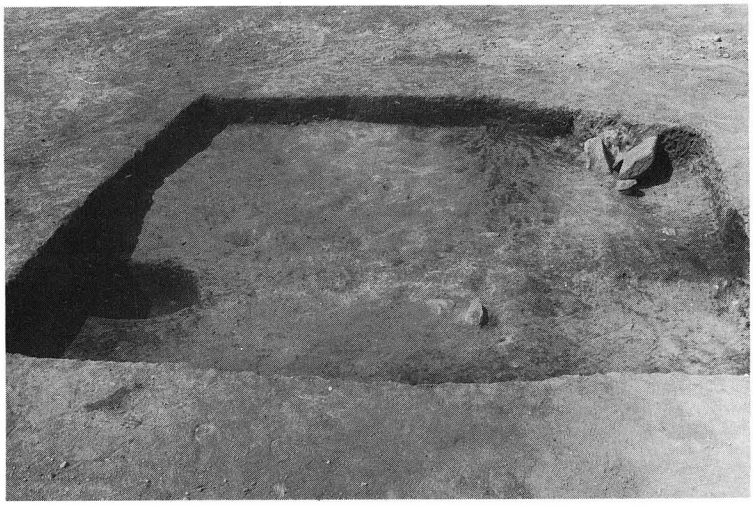
１．第１号住居址カマド

２．第３号住居址



３．第３号住居址カマド

１．第４号住居址



２．第４号住居址カマド

３．第５号住居址

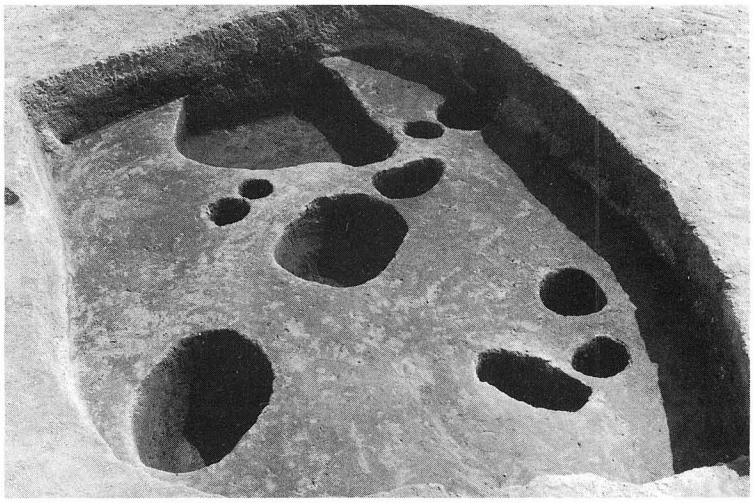
第４図版

１．第５号住居址
銅製品出土状況

２．同

３．第７号住居址

1．第8号住居址



2．第1号掘立柱建物址

3．第1号溝

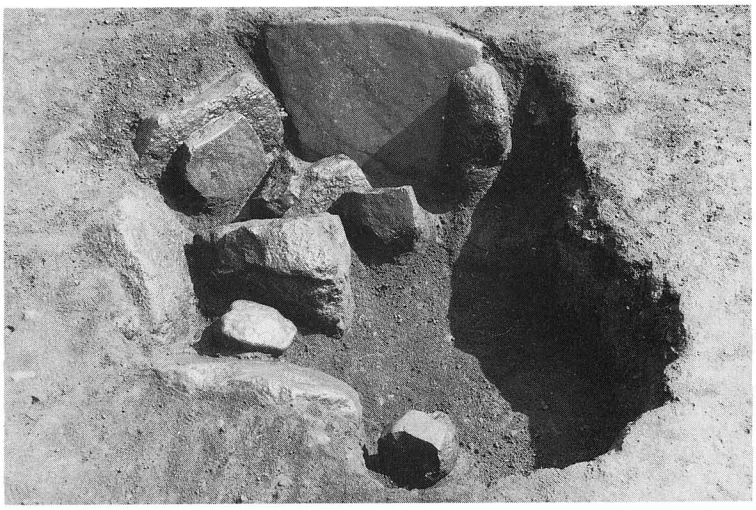
第6図版

1．第1号集石

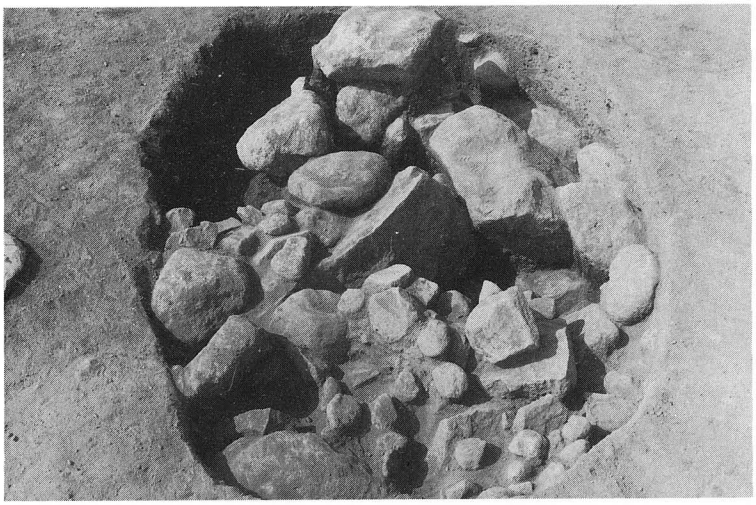
2．第4号土坑

3．第4号土坑
（完掘後）

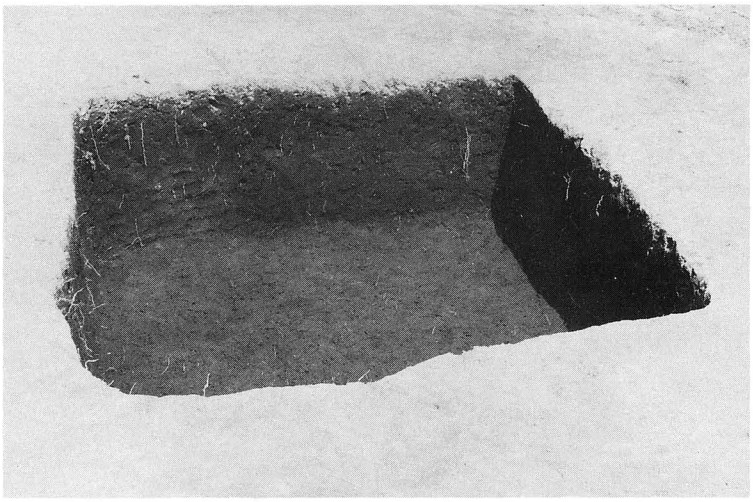
１．第28号土坑



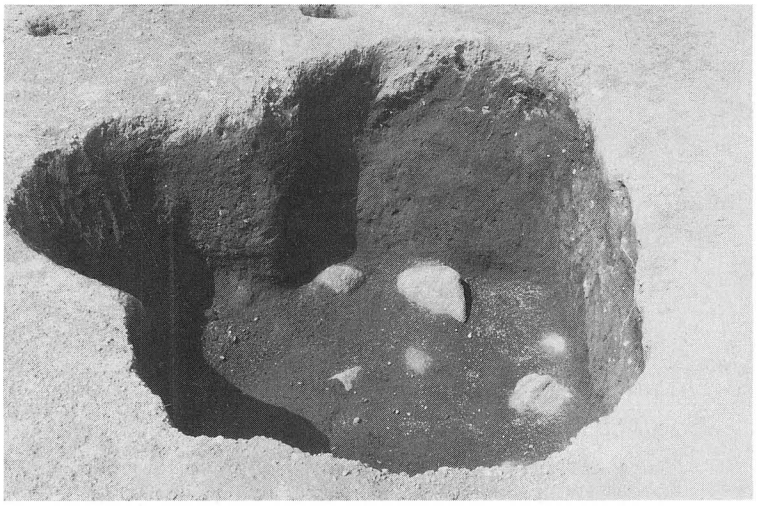
２．第43号土坑



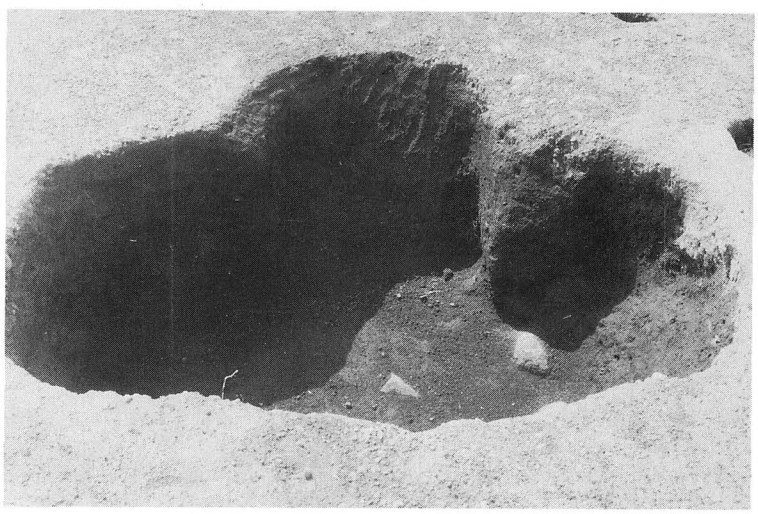
３．第13号土坑
（地下式土壙）



第８図版



１．第44号土坑
（地下式土壙）

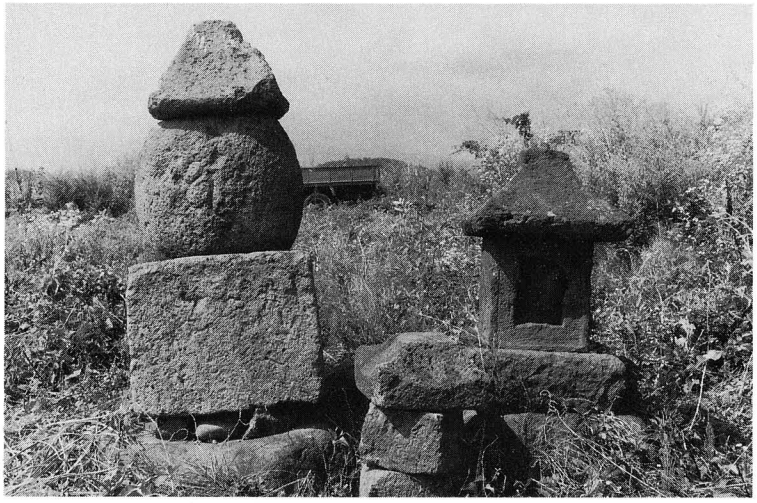


２．同

３．第23～27号土坑

１．第46～50号土坑

２．五輪塔



長坂町埋蔵文化財発掘調査報告 第3集
小和田館跡（小和田北遺跡）

発行日　昭和61年3月31日
編集・発行　長坂町教育委員会
印　　刷　峡北印刷（株）